

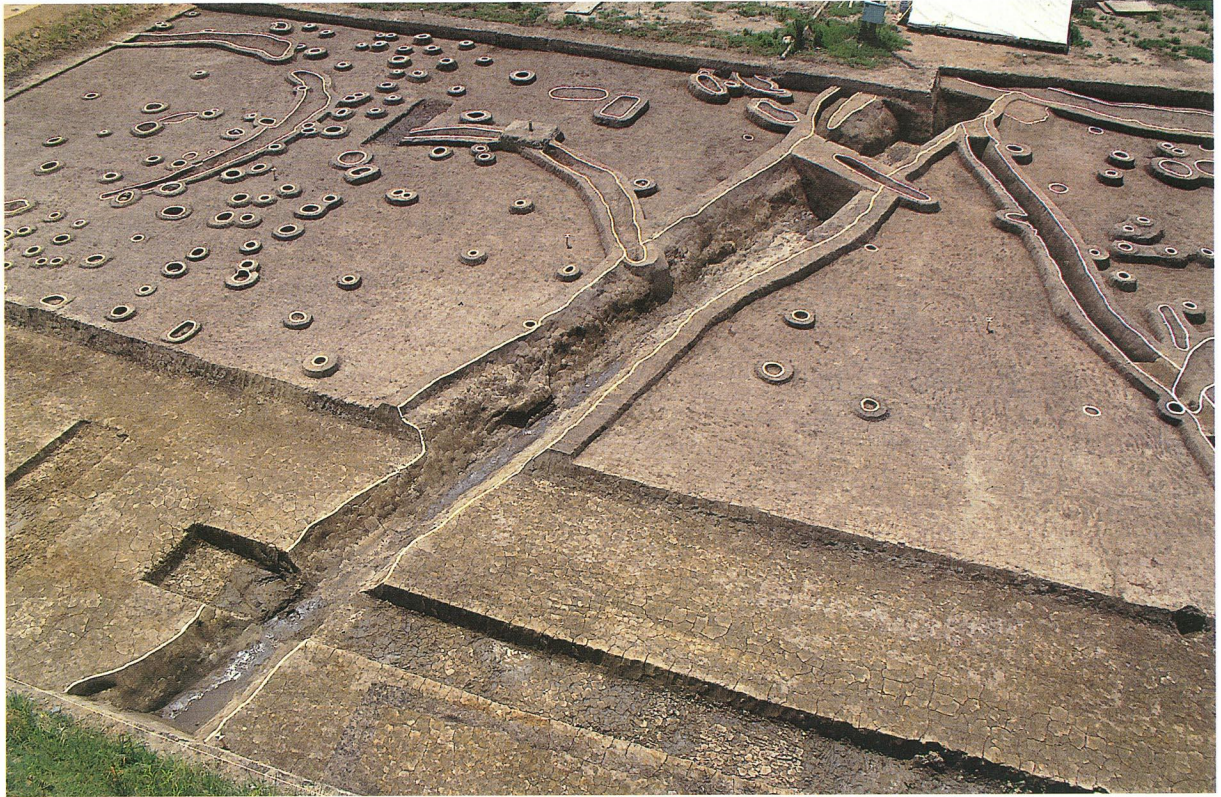
# 高校新設事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報

多肥松林遺跡  
鹿伏・中所遺跡

平成6年度

1995. 3

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター



多肥松林遺跡XISD01遠景



多肥松林遺跡西水路④SK01土器出土狀況



鹿伏・中所遺跡Ⅱ～Ⅳ区航空写真



鹿伏・中所遺跡Ⅶ・Ⅷ区航空写真



鹿伏・中所遺跡Ⅳ区竪穴住居集中地区



鹿伏・中所遺跡Ⅱ区土器棺群

## 例 言

1. 本書は、高校新設事業に伴い平成6年度に実施した多肥松林（たひまつばやし）遺跡、鹿伏・中所（ししぶせ・なかしょ）遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所 長	松本 豊胤
	次 長	真鍋 隆幸
総務	参 事	別枝 義昭
	係 長	土井 茂樹（平成6年5月31日まで） 前田 和也（平成6年6月1日から）
	主 査	大西 健司
	主 査	西村 厚二
調査	参 事	糸目 未夫
	主任文化財専門員	渡部 明夫
	（多肥松林遺跡）	（鹿伏・中所遺跡）
係 長	大山 真充	文化財専門員 西村 尋文
文化財専門員	中川 芳和	文化財専門員 高月 計
主任技師	宮崎 哲治	文化財専門員 中西 昇
調査技術員	井原 温子	主任技師 古野 徳久
		調査技術員 森澤 千尋
		調査技術員 松尾 歩

4. 調査にあたっては、次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称略）  
香川県土木部建築課、香川県高松土木事務所、香川県長尾土木事務所、三木町新設高校準備室
5. 本書の執筆は大山・西村・高月・中川・中西・古野・宮崎が行い、浄書は井原・森澤・松尾が行い、編集は古野が担当した。
6. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SA：柵列    SB：掘立柱建物    SD：溝    SE：井戸    SH：竪穴住居  
SK：土坑    SP：ピット    SR：自然河川    ST：土墳墓・土器棺墓  
SX：不明遺構    SZ：その他の遺構

また、I章では調査時の遺構番号を使用したため、上記の遺構略号と異なる箇所もある。さらにI章の遺構番号には調査区名を冠して称した。なお、調査区については番号のみとする。

例 III区SD01→III SD01    西水路④区SK01→西水路④SK01

7. 挿図の一部は、国土地理院地形図（1/25,000）を使用した。
8. 本文中に使用した例えばN20° Eとは真北方向から20° 東の方向を示すものである。

# 本文目次

I. 多肥松林遺跡	
1. 調査の経緯と経過	（大山） 1
2. 遺跡の立地と環境	（中川） 3
3. 調査区の設定と地形・層序	（宮崎） 6
4. 調査成果の概要	
(1) 縄文時代	（宮崎） 6
(2) 弥生時代前期・中期	（宮崎） 6
(3) 弥生時代後期	（宮崎） 9
(4) 古墳時代	（宮崎） 13
(5) 中・近世	（宮崎） 13
5. まとめ	（宮崎） 14
II. 鹿伏・中所遺跡	
1. 調査の経緯と経過	（西村） 19
2. 遺跡の立地と環境	（古野） 20
3. 調査の概要	（西村） 22
4. 遺構・遺物	
(1) 弥生時代中期	（西村・古野） 23
(2) 弥生時代後期～古墳時代初頭	（西村・古野） 25
5. まとめ	（西村・古野） 32

# 挿図目次

第1図 多肥松林遺跡調査区位置図	2
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 平成6年度調査区遺構配置図	5
第4図 縄文土器実測図	6
第5図 XI S D01出土土器実測図	7
第6図 西水路④ S K01出土土器実測図	8
第7図 XII S K02平・断面図	9
第8図 XII S X02平・断面図	10
第9図 XII S D18出土土器実測図	11
第10図 XII S D07出土土器実測図	12
第11図 XII S K06出土土器実測図	13
第12図 多肥松林遺跡遺構配置図	15
第13図 鹿伏・中所遺跡及び周辺遺跡分布図	21
第14図 鹿伏・中所遺跡調査区割図	22
第15図 S H08平・断面図，出土土器実測図	23
第16図 S P154平・断面図，出土土器実測図	24

第17図	S K07平・断面図	24
第18図	S D15断面図，出土土器・鉄器実測図	25
第19図	S H23平・断面図，出土土器実測図	26
第20図	S H05平・断面図，出土土器実測図	27
第21図	S H03平・断面図，出土土器実測図	27
第22図	S H67炭化材出土平面図・掘り形平面図・断面図，出土土器実測図	28
第23図	S B04平・断面図	29
第24図	S D07・08・27～30断面図，出土土器実測図	30
第25図	S T01～15配置図，S T04・13・15平・断面図	31
第26図	平成6年度調査区北半部遺構配置図	35
第27図	平成6年度調査区南半部遺構配置図	37

## 表 目 次

第1表	鹿伏・中所遺跡平成6年度調査工程表	19
第2表	竪穴住居一覧	34

## 写 真 目 次

写真1	XI区全景	5	写真17	S H08検出状況	23
写真2	西水路④区全景	5	写真18	S P154土器埋置状況	24
写真3	XI S D01断面	7	写真19	S K07土器出土状況	24
写真4	XII S D08	8	写真20	S D15土器出土状況	25
写真5	西水路④S K01土器出土状況	8	写真21	S H23等竪穴住居跡検出状況	25
写真6	XII S K02	9	写真22	S H23柱穴内土器出土状況	26
写真7	XII S H01	9	写真23	S H05検出状況	26
写真8	XII S D18	11	写真24	S H03検出状況	27
写真9	XII S D07	13	写真25	S H67炭化材検出状況	29
写真10	XII S D07土器出土状況	13	写真26	S H67炉内土器出土状況	29
写真11	XI S K06	13	写真27	S B04検出状況	29
写真12	XII S D01～06	14	写真28	S D27～30全景	30
写真13	西水路④S D01・02	14	写真29	S T15検出状況	31
写真14	XII S K01	14	写真30	S T13検出状況	31
写真15	XI S D01	15	写真31	S T04検出状況	31
写真16	XII S D08土器出土状況	15	写真32	II区全景	33

# I. 多肥松林遺跡



## 1. 調査の経緯と経過

高松市内の高校新設（高松桜井高等学校）における埋蔵文化財保護については、平成4年9月県教育委員会が建設予定地である高松市多肥上町・多肥下町において試掘調査を実施し、遺構、遺物を確認したため、校舎等の建設に当たっては埋蔵文化財の保護措置が必要となった。

高校建設予定地は約45,000㎡と広面積のため、保護措置を立案するためには全域の埋蔵文化財の包蔵状況を把握する必要があるため、県教育委員会は平成4年12月、建設予定地全域を対象とした予備調査を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託した。

平成5年2～3月に約2,250㎡の予備調査を実施した結果、予定地中央に弥生時代の土器や木製品を多く包含した自然河川が確認され、さらに河川の両側の微高地には密集度に差はありながらも全域に遺構が存在することが明らかとなった。

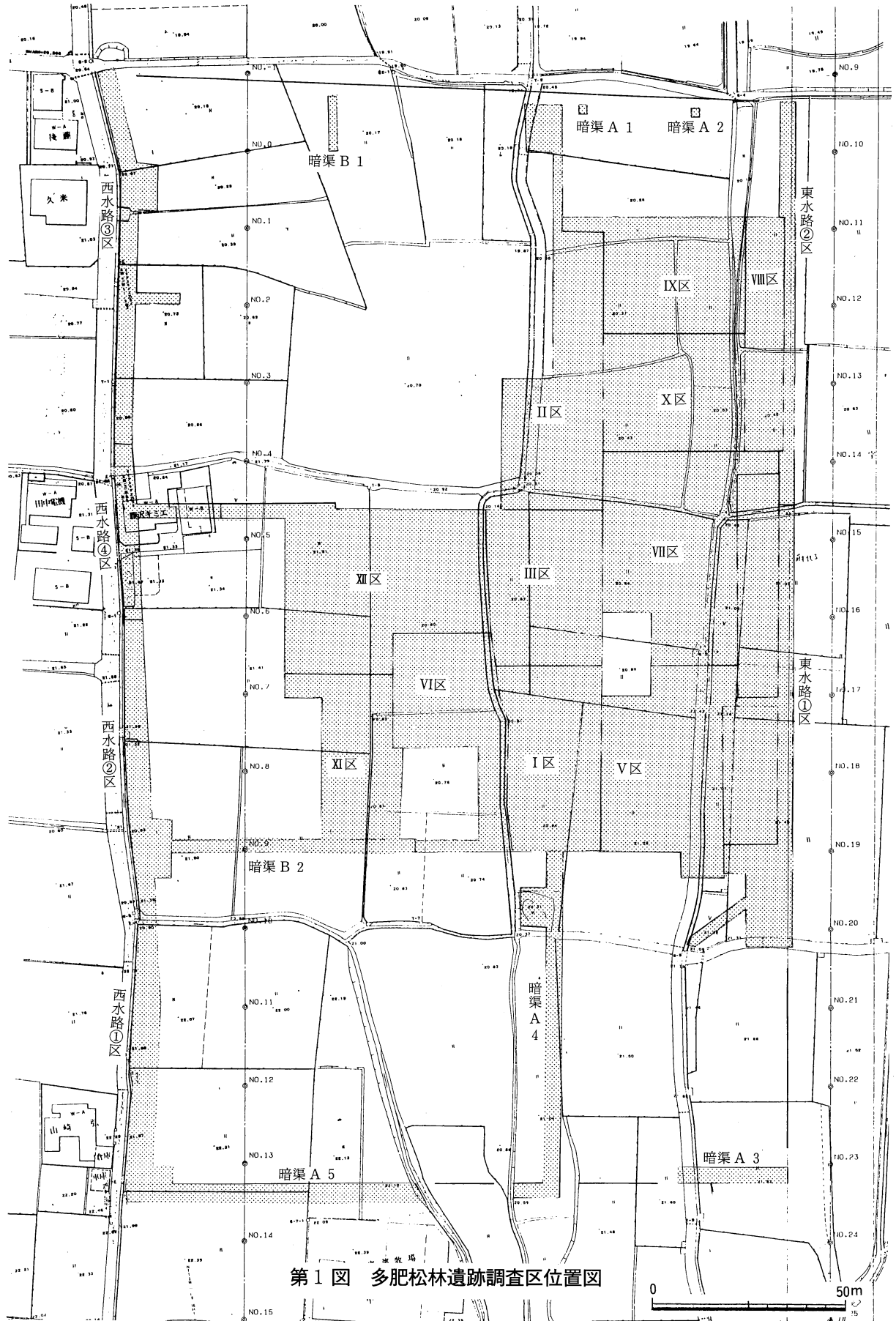
この予備調査結果に基づき県教育委員会高校新設準備室と協議を行い、遺構面より下に掘削が及ぶ工事箇所については発掘調査を実施することとなり、発掘調査が必要とみられる箇所の総面積は約18,000㎡と推定された。

本調査は平成5年度から着手したが、調査に先立ち調査位置・工程等について校舎等の建設を担当する県土木部建築課及び造成工事を担当する県土木部高松土木事務所と協議を開始したが、年度当初には校舎等の位置や規模が確定していなかったため、ほぼ位置が定まっていた用地西側の水路予定地からとりあえず調査を行なうこととし、平成5年4月26日より調査を開始した。

全体の調査位置・工程等についてはさらに協議を繰り返し、管理棟・校舎・体育館や造成工事に伴う水路・暗渠排水路については平成5年度中に調査を終え、工事着工が遅いプール・自転車置場部分については次年度調査ということで協議が整った。その後、数回設計変更等に伴い調査位置や工程を変更しながら調査を進めていった。平成5年度の調査体制は2班を編成したが、前述のように年度当初に調査位置が確定していなかったため、もう一つの班が発掘に着手できたのは6月であった。このようなことから、平成5年度の調査面積は14,010㎡となった。

平成6年度の調査については、平成6年4月4日、関係各課と工程調整を行なった。本年度の調査対象地は北校舎の一部とプール予定地及び自転車置場予定地ならびに未退去家屋部分の水路・暗渠排水路予定地で、調査面積は3,590㎡である。工程はプール予定地等が4月初旬から6月中旬まで、自転車置場予定地が6月中旬から8月初旬まで、未退去家屋部分が8月中旬に調査を行なうことで協議が整い、4月5日より調査を再開した。調査の体制は1班編成である。

北校舎の一部・プール予定地・自転車置場予定地の調査は予定どおりに進行したが、家屋撤去が予定より遅れ8月中旬となったため、この地区は当初計画の8月に終了できないことになった。このため8月3～12日は9月以降に実施予定であった、新設高校用地の南隣の高松土木事務所新設用地の調査の一部を先に行い、8月16日より家屋撤去部分の調査を開始し、9月6日に終了したことで、3ヵ年度にわたる本遺跡の調査は完了した。



## 2. 遺跡の立地と環境

多肥松林遺跡は高松平野の南寄りに位置し、多肥上町字松林・多肥下町字日暮の両地区にまたがって所在する。「多肥」という地名が使われるようになったのは、松平氏の高松藩入封(初代藩主松平頼重,1642年)以後のことであって、平安時代の頃より「多配」あるいは「多部」(読みは「たへ」という呼称が用いられていた。この呼称の由来については一説によると、古墳時代に屯倉(朝廷直轄地)の耕作民である田部(たべ)がこの地に配されたためという。付近一帯は条里制の施行に伴う方格地割が遺存する、比較的閑静な郊外の田園地帯である。

当該地は、東西約150m、南北約300m(面積約45,000m<sup>2</sup>)の長方形を呈する。地形的には、香東川の営力によって形成された扇状地上に立地しており、南から北に緩やかに傾斜する。調査地南端の標高は22.3m、北端で標高20.2mと2.1mの比高差を有する。当該地の中央には、南から北に蛇行しつつ流下していた自然河川が埋没しており、この部分は現在も大きな凹地となっている。そして、当該地及びその周辺の凹地には複数の出水(すい)が存在する。出水とは、地下水位の浅い地点における自然湧水を農業用水として安定的に利用するもので、通常、湧水部を掘り込んでつくられる貯水施設と、そこから耕作地へ導水するための水路を伴う。少雨がちな讃岐平野における農耕地にとって、溜め池とともに貴重な水源となってきたものである。当該地の南方に所在する栗の木出水、平井出水、鈴木出水、さらに当該地内の北鈴木出水は、上述した旧河道内に立地する。この凹地の東西両側は微高地状を呈しているが、長らく耕作地として土地利用されてきたため、段状に削平を受けている。

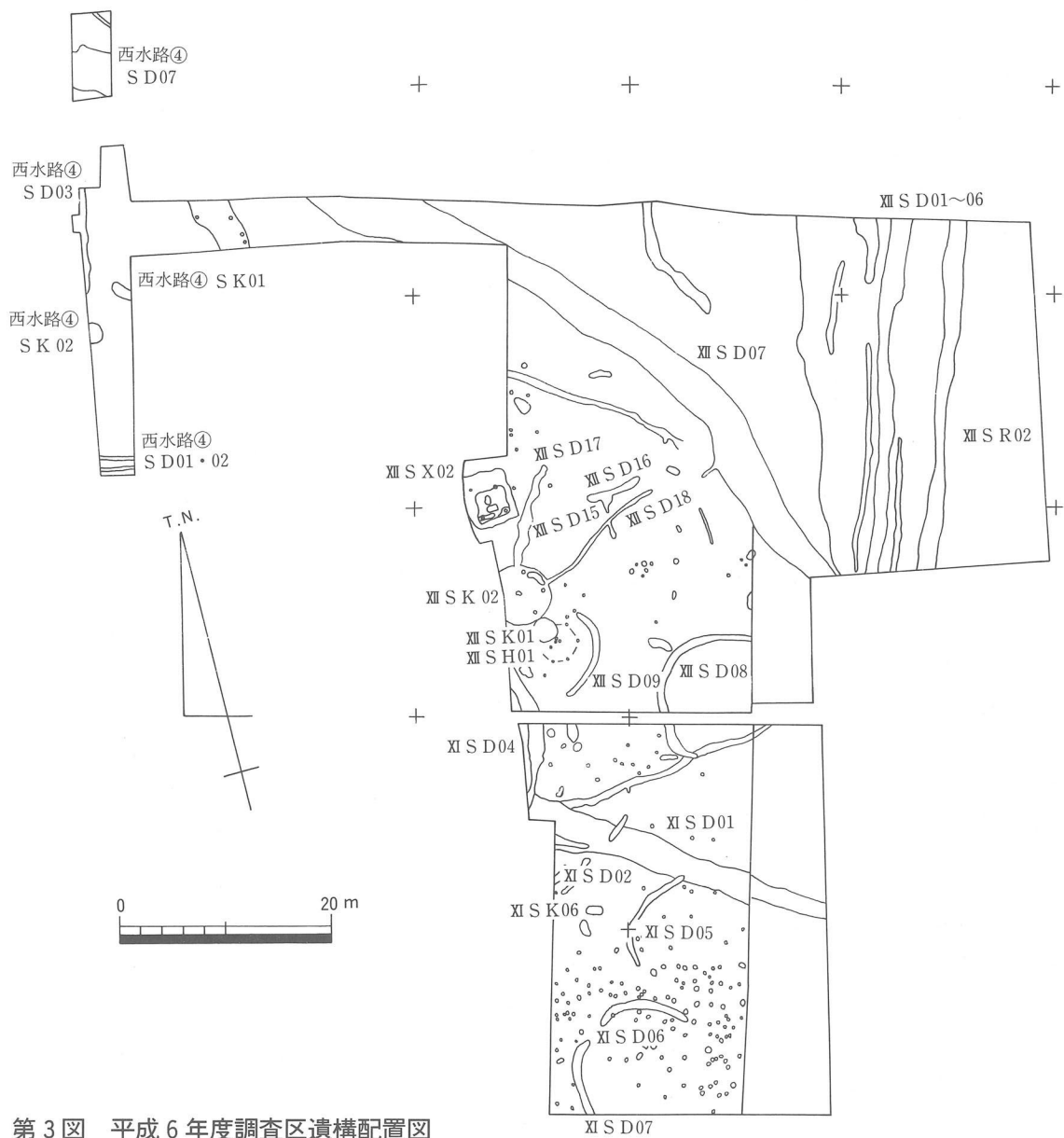
高松平野中央部付近に分布する遺跡は、ここ数年来の相次ぐ発掘調査によって新たに知見が得られたものが多く、弥生時代から古墳時代前期にかけての時期を中心とする遺跡が主である。それ以前のものとしては、旧石器時代とみられる有舌尖頭器が採集された大池遺跡のほか、縄文時代晩期の土器が出土した居石遺跡、井出東I遺跡、浴・長池遺跡、林・坊城遺跡などが挙げられる。いずれも遺物包含層や自然河川などから出土したもので、居住関連の遺構は未検出であるが、林・坊城遺跡で検出された自然河川からは、多量の凸帯文土器とともに木製農耕具類がまとまって出土し、高松平野における稲作の起源をさかのぼらせることになった。当該地近隣の弥生時代以降の遺跡としては、空港跡地遺跡、凹原遺跡、日暮・松林遺跡などがある。空港跡地遺跡については、約26万m<sup>2</sup>にのぼる広大な埋蔵文化財包蔵地のうち、約15万m<sup>2</sup>の発掘調査が完了している。弥生時代前期末から近・現代に至る数多くの遺構・遺物が検出されているが、とりわけ弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落・周溝墓群や、古代末から中世にかけての水田、大規模な区画溝をもつ中世建物などについての知見は、高松平野の歴史を解明するうえで重要である。また、当該地のすぐ北東に所在する凹原遺跡では、弥生時代前期の土坑・溝状遺構をはじめ、弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡が検出された。そのうち、サヌカイト剥片が多量に出土した竪穴住居跡は石器工房とみなされている。さらに、当遺跡と並行して高松市教育委員会によって調査されている日暮・松林遺跡においては、弥生時代中期の掘立柱建物を中心とする集落や、弥生時代後期の竪穴住居を中心とする集落・方形周溝状遺構などが確認されている。当該地の東微高地上の遺構群と連続性のある遺跡である。

なお、高松市林町付近は、8世紀前半(天平年間)に描かれた「弘福寺領讃岐国山田郡田図」比定地と考えられており、高松市教育委員会によって継続的な発掘調査が行われているが、条里制の起源に結びつく直接的な手がかりは、これまでのところ得られていない。



- |           |              |            |
|-----------|--------------|------------|
| 1 多肥松林遺跡  | 9 上天神遺跡      | 17 浴・松木遺跡  |
| 2 日暮・松林遺跡 | 10 太田下・須川遺跡  | 18 林・坊城遺跡  |
| 3 凹原遺跡    | 11 蛙股遺跡      | 19 六条・上所遺跡 |
| 4 空港跡地遺跡  | 12 居石遺跡      | 20 大池遺跡    |
| 5 拝師廃寺    | 13 井手東 I 遺跡  | 21 松縄下所遺跡  |
| 6 加摩羅神社古墳 | 14 井手東 II 遺跡 | 22 キモンドー遺跡 |
| 7 高野丸山古墳  | 15 浴・長池遺跡 I  |            |
| 8 多肥廃寺    | 16 浴・長池遺跡 II |            |

第 2 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 平成6年度調査区遺構配置図

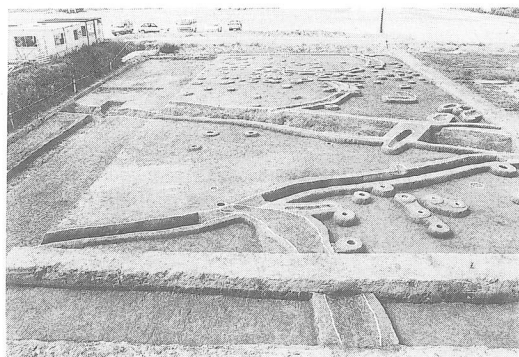


写真1 XI区全景

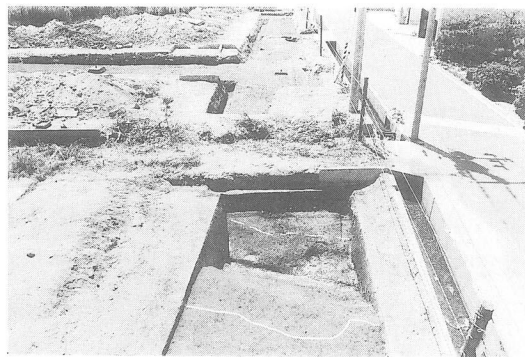


写真2 西水路④区全景

### 3. 調査区の設定と地形・層序

今回の調査対象地は、東西約150m、南北約300mの南北に長い長方形を呈している。調査対象地のうち校舎等の建物部分をⅠ区からⅩⅢ区に12分割し、水路部分を東側2・西側4に6分割し、さらに暗渠排水路部分をA1からA5とB1・2に7区分して調査区を設定した(第1図)。このうち、今年度はⅩⅠ・ⅩⅢ区・西水路④区の調査を行なった(第3図)。

また、調査対象地の地形は調査着手前の地形からも判断できたように、中央部を北流する自然河川域が存在し、その両側は現在は水田と家屋として土地利用されている微高地が展開している。これらを西から順に西微高地・自然河川域・東微高地と呼称する。

東・西微高地の基本的な土層序は、上から順に耕作土・床土・黒褐色粘土層・明黄色粘土層となっている。微高地部分は後世の削平を受けているために、黒褐色粘土層が存在せず床土直下に明黄色粘土層が見られる部分もある。遺構は、黒褐色粘土層上面および明黄色粘土層上面で検出している。

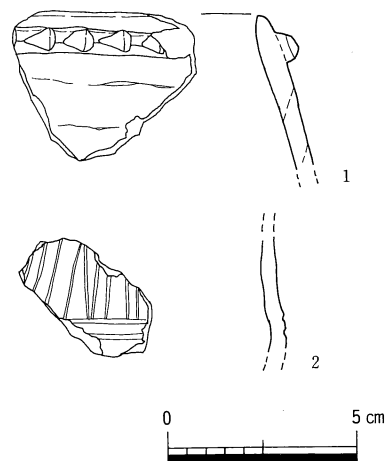
### 4. 調査成果の概要

今年度に調査を行なったⅩⅠ・ⅩⅢ区・西水路④区は、ⅩⅢ区の一部(ⅩⅢ区東半)が自然河川域にかかる以外はすべて西微高地にあたっている。検出した遺構は弥生時代、古墳時代、中世、近世のものであるが、主体を占めるのは弥生時代のものである。遺構の種類は竪穴住居・土坑・溝状遺構・柱穴などがあるが、すべて後世の削平を受けている。

#### (1) 縄文時代

西微高地ⅩⅢ区において、弥生時代以降のベース層である黒褐色粘土層のなかから、縄文時代晩期後半に属する凸帯文土器片が出土している(第4図)。1は砲弾型の胴部をもつ深鉢の口縁部である。口縁端部からやや下がった位置に刻目凸帯をめぐらす。口縁端部はやや尖り気味に仕上げられており、刻目はD字刻みを施している。2は屈曲型の深鉢の胴部である。頸部と胴部の境は沈線で区画し、頸部にはへら描き沈線で文様を施している。

この時期に属する明確な遺構は検出していないが、調査区の周辺に、当該期の遺構が存在する可能性がある。



第4図 縄文土器実測図

#### (2) 弥生時代前期・中期

前期の遺構は西微高地ⅩⅠ区で溝状遺構2条を検出した。

溝ⅩⅠS D01は幅3.0m、深さ1.3mをはかるが、本来はもっと規模の大きな溝である。埋土である砂質土は上・下に大きく2つに分かれるが、遺物が出土したのは上層だけである。上層出土の土器(第5図)は、28ℓ入コンテナ3箱と出土量としてはさほど多いものではないが、壺・甕・鉢が見られる。1～3は壺である。1は口縁部が大きく外反するもので、頸部にへら描き沈線文を6条施している。2は直立気味の頸部から内彎気味に開く口縁部をもつ。内外面共

に粗いハケ目調整で、頸部に文様は施されていない。3は壺の胴部で、扁球形の胴部の外面に2条の刻目凸帯を貼り付けている。4・5は甕である。4は内彎しながらすぼまる口縁部の端部外面に断面三角形の凸帯を貼り付けた、いわゆる逆L字口縁甕である。口縁部下にヘラ描き沈線文を7条施す。5も逆L字口縁甕であるが、口縁端部に刻目を施している。6は鉢である。甕と同様に、口縁端部に凸帯を貼り付けたもので、口縁部下にヘラ描き沈線文を2条施している。当該遺構の所属時期は、壺の貼付凸帯、逆L字口縁甕、壺・甕ともに多条化したヘラ描き沈線文などから、弥生時代前期後半頃と位置付けられる。

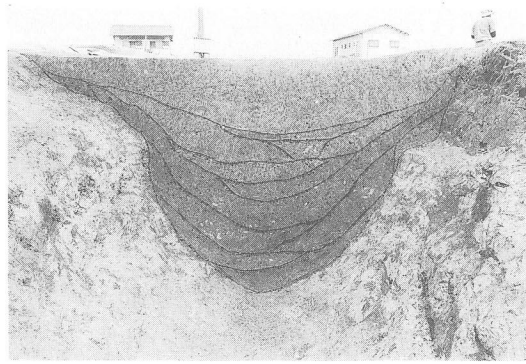
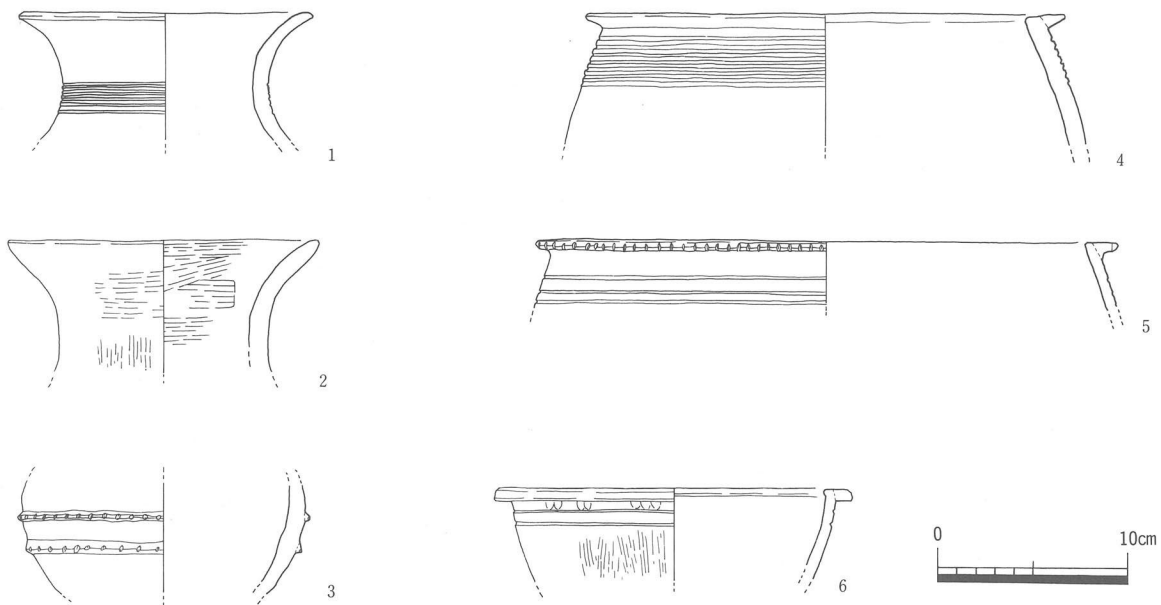


写真3 XI S D01断面

この溝XI S D01と合流（あるいは分岐）する溝状遺構が溝XI S D02である。幅0.3m、深さ0.2mの規模で、溝XI S D01とは溝底の比高差が約1.1mある。遺物はまったく出土していないが、溝XI S D01と同時期の所産である。

中期の遺構は西微高地Ⅸ区で溝状遺構3条、西微高地Ⅹ区で溝状遺構1条、西微高地西水路④区で土坑1基を検出した。

溝Ⅹ S D15は幅0.4m、深さ0.1mで、溝Ⅹ S D16から南へ延びている。溝Ⅹ S D16と同じ埋土をもっており、同時期に機能していたものである。溝Ⅹ S D15から壺が1点出土している。直線的に外に開く口頸部の外面に貼付凸帯を2条めぐらせたもので、中期中葉頃のものである。



第5図 XI S D01出土土器実測図

溝ⅩⅢSD08は幅0.7m、深さ0.2mの規模で、東側を削平によって消失しているため、現状では約半周の円弧を描く溝状遺構である。その一部には長さ2.0mの規模で一段深くなった部分が見られる。中期中葉頃の甕が出土している。溝ⅩⅢSD08と同様に約半周の円弧を描く溝が3条(ⅩⅢSD09, ⅩⅠSD05, ⅩⅠSD06・07)見られるが、弥生土器の細片しか出土していないことから、同時期に存在していたものかは不明である。また、その性格についても検討する必要がある。

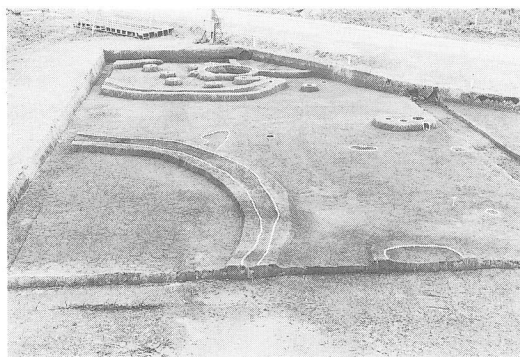


写真4 ⅩⅢSD08

溝ⅩⅠ区SD04は幅0.9m、深さ0.2mの規模をはかり、溝ⅩⅠSD01が埋没した後に穿たれている。直線的に外へ開く口頸部の外面に、刻目を施した断面三角形の貼付凸帯を2条めぐらせた、中期中葉頃に位置付けられる壺が1点出土している。

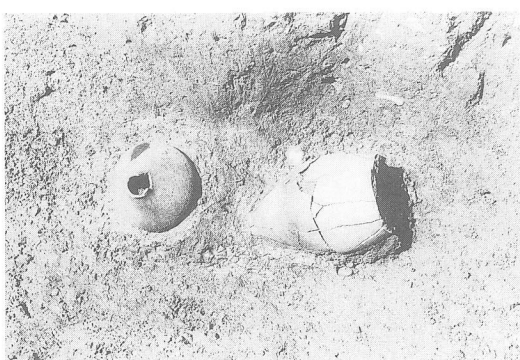
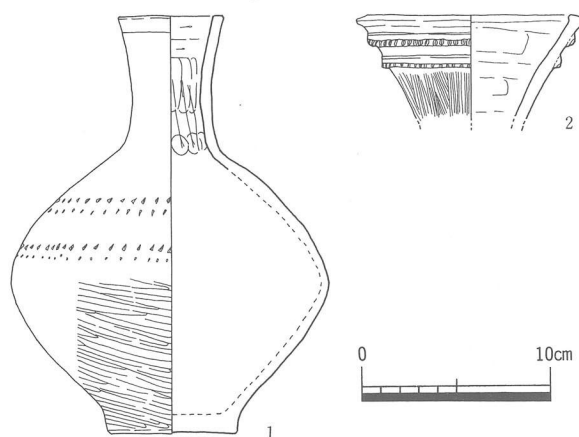


写真5 西水路④SK01土器出土状況

土坑西水路④SK01は、一部が調査区外にかかっているため全体の規模はわからないが、検出長1.8m、幅0.9m、深さ0.4mをはかる楕円形の土坑である。この西水路④SK01からは壺2点と甕1点が出土している(第6図)。1はたまねぎ形の胴部に短めの細い頸部が付く壺である。胴部の最大径付近と胴部上半にそれぞれ刺突文をめぐらせている。外面は丁寧なへら磨き調整を施している。2は直線的に開く壺の口頸部である。外面に2条の貼付凸帯をめぐらせている。凸帯には刻目を施している。外面は細かなハケ目調整である。図示できなかった甕は、倒鐘形の胴部から外方へ短く屈曲する口縁部をもつもので、外面は丁寧なへら磨き調整を施している。これらの土器はいずれも、中期中葉頃に位置付けられる。



第6図 西水路④SK01出土土器実測図

これらの遺構の他に、ⅩⅢ区東半で検出した自然河川ⅩⅢSR02の下層に堆積した黒褐色粘土からもわずかではあるが、前期・中期の土器(甕・壺など)の破片が出土している。また、次節で述べる溝ⅩⅢSD07においても、最下層から中期前葉から中葉の土器片が少量出土している。



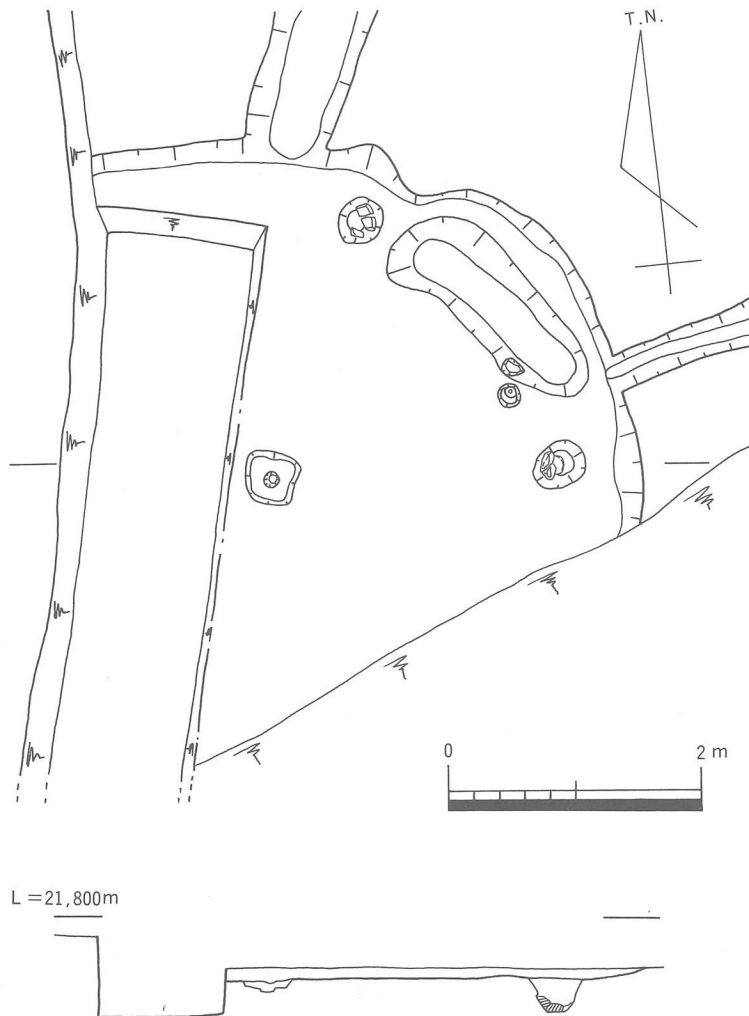
(3) 弥生時代後期

当該期の遺構は、確実なものとして西微高地Ⅲ区で竪穴住居2棟と溝状遺構4条、西水路④区で溝状遺構1条を検出した。この他にも、同様の埋土をもつ遺構や、弥生土器の細片を出土する遺構が存在しており、当該期の遺構の数はもう少し増えるものと思われる。

竪穴住居ⅢSK02 (第7図)

は一部が調査区外にかかっているものの、直径約6mの円形の竪穴住居である。中央部に隅丸方形の炉跡、その周囲に支柱穴2個と土坑1基を確認した。支柱穴は6本と推定できる。壁溝はその痕跡すら認められなかったことから、当初から存在しなかったものと思われる。弥生土器の細片が少量出土している。このⅢSK02は、壁から2本の排水溝(ⅢSD17・18)が、北・北東方向にそれぞれ延びている。

竪穴住居ⅢSK02の南西に近接して検出した規則的に配列された柱穴を、竪穴住居ⅢSH01とした。竪穴住居ⅢSH01は著しい削平によって支柱穴しか確認できていない。近世の土坑ⅢSK01によって支柱穴の1つを消失しているが、6本柱の竪穴住居に復元できる。平面形はおそらく円形を呈していたものと思われる。中央には痕跡しか残っていないが、浅い柱穴状を呈



第7図 ⅢSK02平・断面図

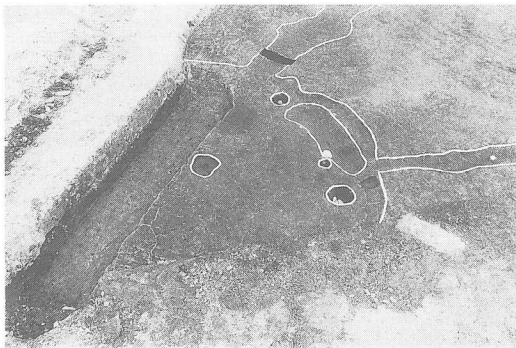


写真6 ⅢSK02

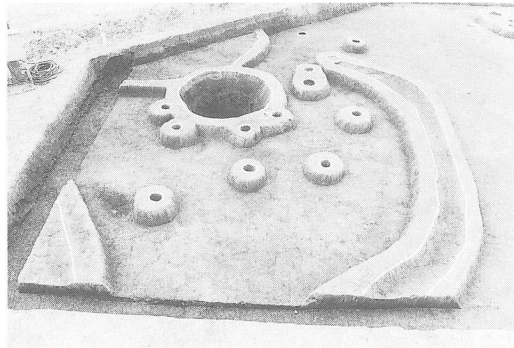
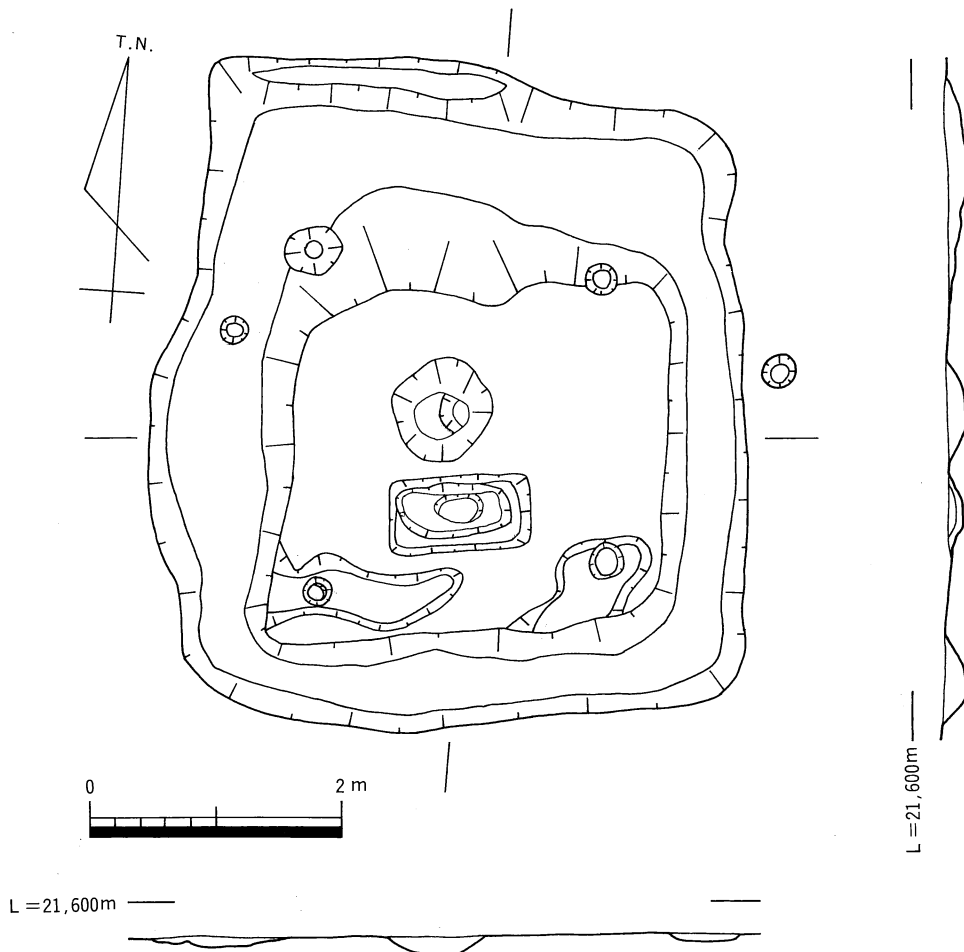


写真7 ⅢSH01

する炉跡が遺存している。柱穴から弥生土器細片が出土している。

竪穴住居ⅩⅢS X02（第8図）は東西5.2m、南北4.6mの規模をもつ隅丸方形の竪穴住居である。調査当初は隅丸方形の平面形態、周囲を取り巻く溝状遺構の存在、ほぼ中央に存在する長方形の土坑などから方形周溝墓の可能性を考えていたが、調査途中で検出した4つの柱穴の方向と周囲の溝状遺構の方向が合致したことから、竪穴住居であると判断した。溝状遺構で取り囲まれた部分の中央に直径0.8mの円形と、1.1m×0.6mの長方形の2つの土坑が近接して存在する。いずれの土坑からも少量ではあるが炭の破片が出土しており、2つの土坑がセットになった炉跡と考えられる。支柱穴は4本で、北の2つは溝状遺構にかかっている。周囲には幅約1.4~0.6m、深さ0.2mの幅が広く、底の浅い壁溝状の溝状遺構がめぐらされている。南北部分はやや深く、東西部分が浅い。中央の2つの土坑や溝状遺構から後期の土器細片が少量出土している。後期の段階で2つのセットになる炉をもつ竪穴住居や、幅の広い壁溝をもつ竪穴住居の類例調査など、今後検討していく必要がある。



第8図 ⅩⅢS X02平・断面図

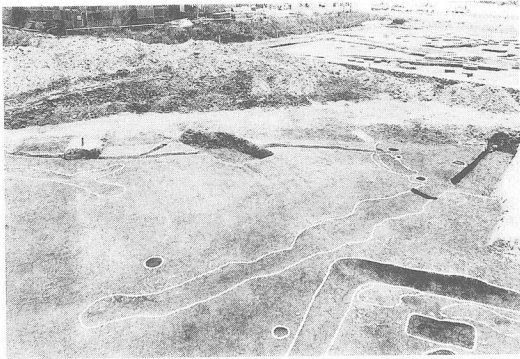
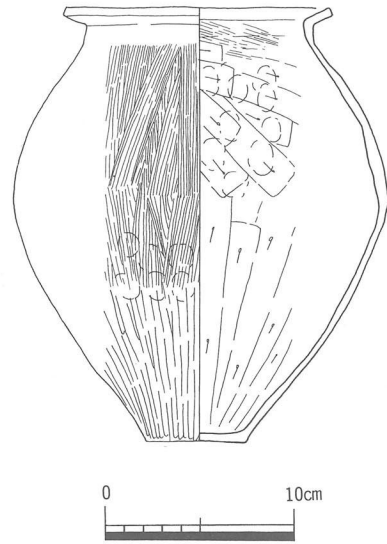


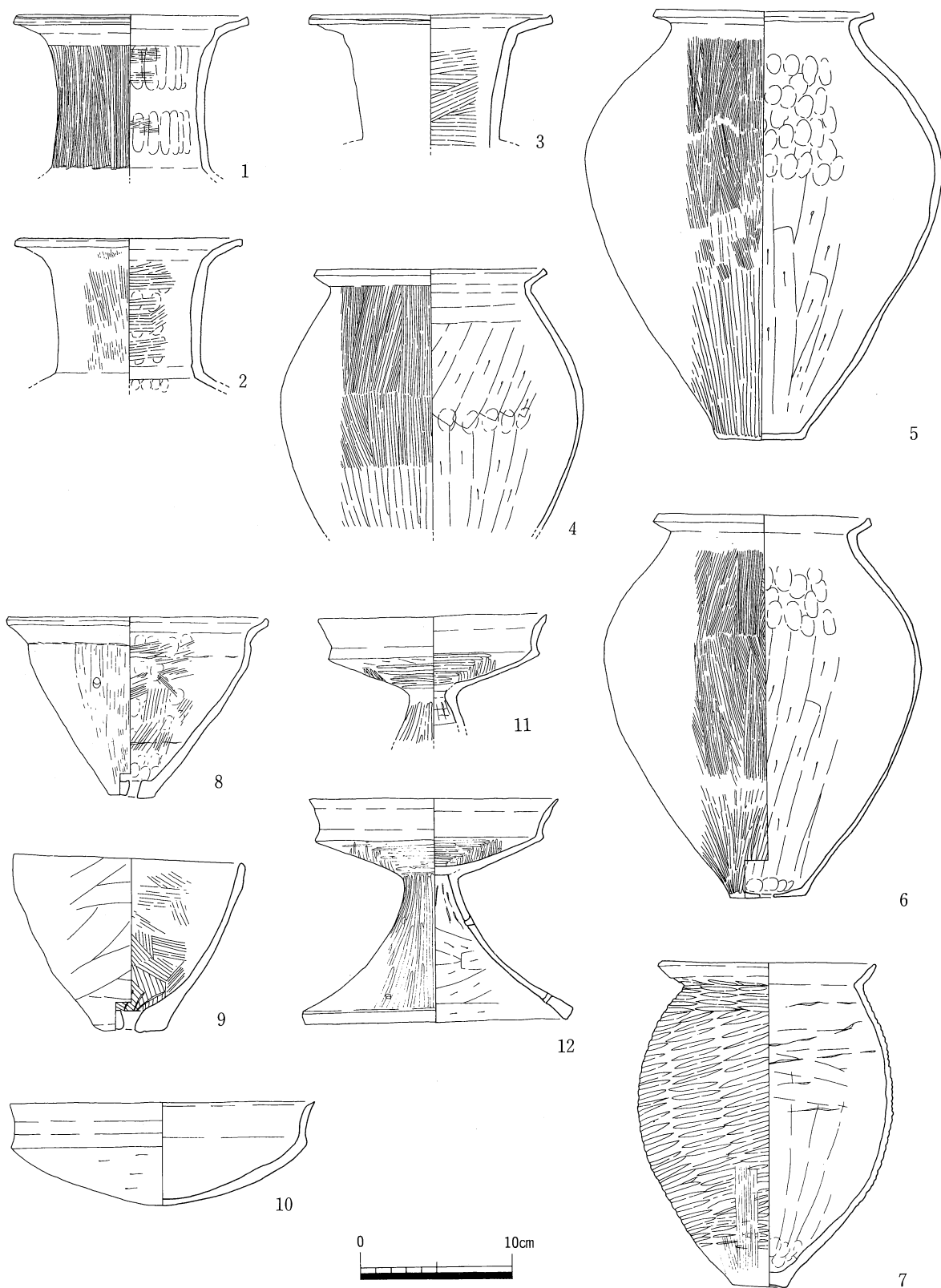
写真8 XII S D18

溝XII S D18は竪穴住居XII S K02から北東方向に延びる排水溝であり、幅0.3m、深さ0.1mの小規模な溝状遺構である。西微高地の等高線にほぼ直行して、自然河川の方向に延びる。途中で南から溝XII S D14と合流して、さらに北東方向に続いている。削平を受けているため、本来はもう少し規模の大きなものであったと思われる。埋土中から後期後葉の土器が少量出土している。第9図は甕である。やや直立気味の頸部から屈曲して口縁部にいたる。体部外面には下半にヘラ磨き、上半にハケ目が施され、内面には頸部下までヘラ削りが施されている。体部最大径は中央やや上方にある。

溝XII S D07は、昨年度の調査区から続く溝状遺構である。幅3.5m、深さ1.3mの規模で、断面はV字形を呈する。南東から北西へ緩やかに弧を描いており、溝西水路④S D07はこの溝の延長部分にあたる。埋土は大きく上・中・下層の3つに分けることができる。上層は破片となった土器が多く、中層は比較的遺存状態の良好な土器が含まれており、下層は少量の土器の破片が出土している。下層からは後期中葉頃の土器に混じって中期中葉頃の少量の土器破片が出土しており、溝XII S D07は中期中葉頃の段階に掘られた可能性がある。土層断面の観察からは、最低1回以上の掘り直しを行なっていることがわかる。遺物の出土状況は、西微高地Ⅱ区の南西部分が少なく、北西部へ寄るほど土器の量が増えてくる。西微高地西水路④区では再び少なくなっている。土器量の一番多い部分の南は調査区外になるが、さらに南には竪穴住居が存在していることから、この付近が当該期の居住地の中心にあたることが予想される。この溝から出土した土器は、28ℓ入コンテナにして約35箱にあたり、土器以外ではサヌカイト製の打製石器（石庖丁・石鏃）が若干出土している。第10図はXII S D07中層から出土した土器である。1から3は広口壺である。いずれも、ほぼ直立する頸部から外方へ開く口縁部をもつ。1・3は口縁端部を摘み上げているが、2は丸味を帯びている。4から7は甕である。4から6は「く」の字に屈曲する頸部をもち口縁端部を摘み上げている。いずれも外面にはハケ目調整を施し、内面にはヘラ削り調整を施しているが、ヘラ削りの範囲が5・6は体部最大径付近までであるのに対して、4は頸部付近まで及んでいる。6の底部には、焼成前の穿孔が施されている。7は内彎する体部から「く」の字に屈曲する頸部をもつもので、体部外面には叩き目が残されている。8から10は鉢である。8は短く外反する口縁部をもっている。体部と底部にそれぞれ1つの焼成前の穿孔を有している。9はボウル状を呈する直口口縁の鉢である。底部に焼成前の穿孔をもつ。11・12は高杯である。ともに杯部は比較的浅く、立ち上がり部分は中位で折れて



第9図 XII S D18出土土器実測図



第10图 XII S D07出土土器实测图

開く。12は強く外反しながら端部にいたる脚部をもつ。脚部には上下2段に6個の穿孔が残る。図示した土器のうち1・4・5・6・11・12は茶褐色系を呈し、胎土に角閃石・金雲母を含んだ、いわゆる「下川津B類」土器の範疇に入るものである。

この溝ⅪSD07からは個体復元が可能な土器が多く出土しており、復元・整理作業を通して遺物の資料化をはかり、層位に時期差が存在するのかなどの細かな検討をおこないたい。

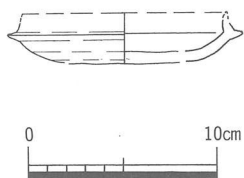


写真9 ⅪSD07



写真10 ⅪSD07土器出土状況

#### (4) 古墳時代



第11図 ⅪSK06出土土器実測図

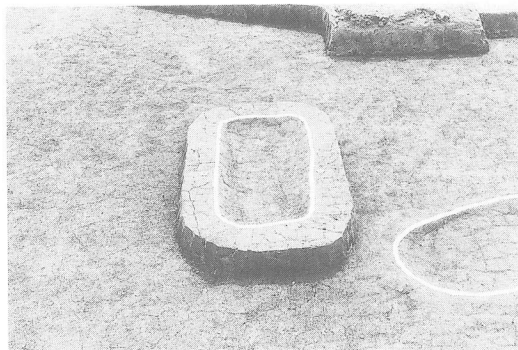


写真11 ⅪSK06

当該期の遺構は、確実なものとしては西微高地Ⅺ区で検出した土坑1基があるにすぎない。土坑ⅪSK06は、1.5m×0.8m、深さ0.2mの隅丸長方形の土坑である。埋土中から6世紀末頃に位置付けられる須恵器杯身(第11図)の破片が出土している。

西微高地Ⅺ南半で多数検出した柱穴の中には、土坑ⅪSK06と近似した埋土をもつものも若干認められ、当該期に比定しうるものも含まれているものと思われる。

#### (5) 中・近世

中世の遺構としては、自然河川域Ⅺ区東半で溝状遺構6条、西微高地西水路④で溝状遺構3条を検出した。

溝ⅪSD01から06は、自然河川ⅪSR02が埋没した後に掘られた溝状遺構である。いずれも深さ0.2mと浅いもので、細砂を埋土としており一時的に水が流れたために溝状を呈した可能性もある。須恵器・土師器などの細片が少量出土している。

溝西水路④SD01・02は、幅0.4m、深さ0.1mのほぼ同規模の溝状遺構で、並行している。どちらも当該地周辺に見られる地割りの方向と一致している。溝西水路④SD01は西端部分を

攪乱によって破壊されているものの、S D02とは約1mの距離を保ちながら並行していることから、この2本の溝状遺構は小道に伴う側溝の可能性はある。

溝西水路④S D03は調査区西端で一部を検出したにすぎないが、溝西水路④S D01・02と直交する方向を持ち、条里地割りの里界にあたる可能性がある。須恵器・土師器が少量出土している。

近世の遺構としては西微高地ⅩⅢ区で土坑1基、西微高地西水路④区で土坑1基を検出している。

土坑ⅩⅢS K01は、直径2.4m、深さ2.2mの円形の土坑である。埋土は淡灰褐色混細砂粘質土の単一埋土で、一度に埋め戻された可能性がある。埋土の中位から一木鋤が出土した。井戸の可能性も考えたが、湧水層まで達していないことから水溜めとして機能していたものと思われる。

西水路④S K02は直径1.8m、深さ0.4mの円形の土坑である。中央には大型の甕を据えており、いわゆる野壺である。

西微高地ⅩⅡ区南半で検出した柱穴の中には、当該期とおぼしき土器の細片を含むものも認められることから、当該期の柱穴も含まれているが、建物を復元するには至っていない。

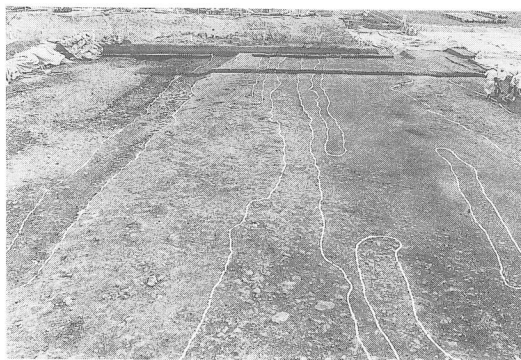


写真12 ⅩⅢS D01～06

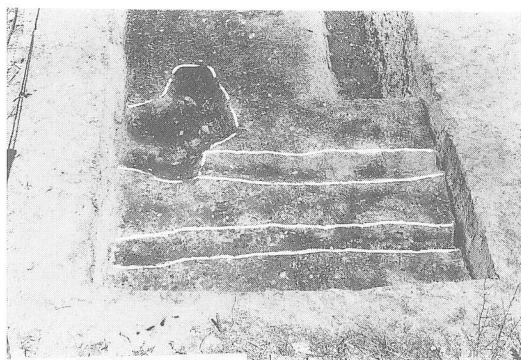


写真13 西水路④S D01・02



写真14 ⅩⅢS K01

## 5. まとめ

今年度の調査をもって、予備調査を含めて足掛け3年にわたる多肥松林遺跡の発掘調査が終了した。ここでは昨年度の調査成果も併せて、今回の調査の要点をまとめておく。

今回の調査で初めて縄文時代晩期の土器を検出した。遺構は確認できていないが、当該地の周辺に縄文時代の遺構が埋没している可能性を示すものといえよう。

弥生時代の遺構は本遺跡の主体をなすものである。前期から後期までの諸段階の時期の遺構を確認しているが、中期から後期の遺構が大半を占めている。

前期の遺構は西微高地ⅩⅡ区で検出した溝状遺構2条にすぎないが、このうちの溝ⅩⅢS D01はかなり規模の大きな溝状遺構であり、この溝状遺構を開削・維持した人々の集落遺跡の存在を示唆するものとして重要である。溝ⅩⅢS D01と連続すると考えられる溝状遺構を、昨年度調査の西水路②区で確認しており、この溝状遺構は緩やかに弧を描きながら北西に向かっている。

X = 143,600

X = 143,500

X = 143,400

Y = 51,500

Y = 51,500

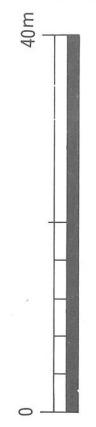
Y = 51,400

Y = 51,400

X = 143,600

X = 143,500

X = 143,400



- 弥生時代
- 古墳時代
- 古代末~中世

第12図 多肥松林遺跡遺構配置図

西微高地Ⅺ区では、この溝ⅪS D01の南側で当該期に属する可能性をもつ柱穴も存在するようであり、居住域の北限を画する溝状遺構であろう。溝ⅪS D01から出土している土器は前期後半の土器群であり、当該地での本格的な人々の定住はこの時期から始まるといえる。



写真15 ⅪS D01

中期の遺構は、確実なものとしては東微高地で竪穴住居跡1棟・土坑3基を、西微高地では西水路④区で土坑1基・溝状遺構2条を検出した。また、自然河川の下部に堆積している黒色粘土層からは、多量の土器・木器が出土している。当該地中央を蛇行しながら北流する自然河川は、この段階にはすでに埋没を開始して湿地状を呈していたらしい。ここから出土した土器・木器は、南半では西岸（西微高地）寄りに、北半では東岸（東微高地）寄りに偏在する傾向がみられ、それぞれの微高地上から投棄されたものと思われる。出土した土器は櫛描文を主体とする文様が施されているものが多く、凹線文は含まれないことからしても、中期前葉から中葉にかけての所産である。高松平



写真16 ⅪS D08土器出土状況

野においては、中期の土器の出土例は少なく、土器の変遷などを考える上で貴重な資料になるものである。ともに出土した木器には、農具（広鋤・狭鋤・泥除具・膝柄鋤・堅臼など）、工具（斧柄・横槌など）、建築材（梯子・杭など）、容器（脚付片口形容器・盤・槽など）、祭祀具（剣形・鳥形？・男根形など）、用途不明品などの様々な種類が見られる。東微高地上では、他にも遺物を伴わないため時期を特定できない痕跡だけの竪穴住居や掘立柱建物を検出しており、これらの一部は当該時期に属するものが含まれている可能性がある。ここには竪穴住居と掘立柱建物で構成される小規模な集落が想定できよう。西微高地上では、中期中葉頃の溝状遺構と土坑を検出したのみであり、近辺に集落遺構が存在しているかについてはわからない。

後期の遺構としては、東・西微高地上で多数の溝状遺構・土坑・柱穴を検出した。自然河川は前段階に引き続き湿地状を呈していたらしく、黒色粘土層上面から後期の土器が出土している。この自然河川がほぼ埋没した段階に、河川に沿うような方向で溝状遺構を掘っている。北端付近でわずかに遺物が出土しており、後期の所産である。東微高地上では、南半部に竪穴住居と掘立柱建物からなる小規模な集落と、北半部に同様な小規模集落の2つの集落が想定できる。西微高地上では、隅丸方形1棟と円形2棟の竪穴住居が近接しており、ここにも1つの集落を想定できよう。さらに、西微高地の北側縁辺部には規模の大きな溝ⅪS D07が緩やかに弧を描きながら走行している。あたかも西微高地の竪穴住居群を大きく取り囲むかのようにも観察できる。この溝ⅪS D07の性格や埋没段階の細かな時期差の有無、さらには東西微高地上の建物の時期比定など、今後に残された課題は多い。

古墳時代の遺構を今年度の調査で初めて検出した。昨年度の調査では包含層から若干の遺物は出土していたが、遺構は検出していなかった。そのため当該期は空白期と考えていたが、今



年度の調査の結果、それは覆される事となった。ただし検出した遺構は土坑1基のみであり、当該期の様相を復元するには至っていない。

中世に入ると、ほとんど埋没している自然河川の北半部分に、粘質土を入れた大規模な造成・整地を行なっている。これによって北半部は完全に河川としての機能を失うこととなった。この段階にはⅢ区東半を北流していたと考えられるが、ほとんど湿地に近い河川となっているようである。旧中州部分には自然河川から水を引き込むための溝状遺構がみられ、その北東で素掘りの井戸を1基検出している。東微高地では当該地の周辺に現在も遺存する方格地割と同じ方向をもつ溝状遺構を確認している。北端付近で掘立柱建物が3棟存在するが、散在している。西微高地でも同様の方向の溝状遺構を3条検出している。中央付近と南端付近で1棟ずつの掘立柱建物を検出したが、やはり散在している状況である。ただし、東微高地北東部・西微高地中央部近辺には当該期と考えられる柱穴が群在している部分も見られ、居住域の可能性もある。しかし、東西微高地上で部分的ではあるが鋤溝群も確認していることからしても、当該期の土地利用は、水田や畑などの生産域としてその大半が利用されていたものと思われる。

近世になっても、引き続き生産域として土地利用されていたらしく、野壺や水溜めの土坑が若干見られる程度である。

以上、弥生時代を中心とした多数の遺構・遺物を検出したにもかかわらず、簡単な概要報告となったが、今後、十分な整理作業を通して資料化を進め、多肥松林遺跡の細かな内容や変遷などを考えていきたい。

## II. 鹿伏・中所遺跡

# 1. 調査の経緯と経過

香川県教育委員会は、木田郡三木町鹿伏地区において、平成8年度開校を目標に県立高校を建設する計画を進めている。この計画を進めるにあたり香川県教育委員会は、平成6年度に試掘調査を実施し予定地の一部、面積にして15,391m<sup>2</sup>の範囲で、保護措置が必要であることが確認された。

その試掘結果にもとづき香川県教育委員会は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下センターと略称）と協議を進め、平成6年度より7年度まで二年にかけて調査をする点で合意した。そして平成6年4月1日付けでセンターとの間で「埋蔵文化財委託契約書」を締結し、本年度よりセンターが調査を実施することになった。

平成6年度の調査は二班体制で実施した。1班は土木業者に機械・人力掘削を請負わせる工事請負い方式、2班は機動性をもたせるため、直営方式で調査を実施した。調査は用地買収の関係で平成6年7月より開始し、平成7年3月末日に終了した。なお、詳細な調査工程は第1表に示したとおりである。

本年度の調査対象面積は13,041m<sup>2</sup>を測る。調査はI期工事のうち最も工事を急ぐ、北校舎・管理棟部分より着手した。この部分は集落のほぼ中央部分にあたり、弥生時代中期～後期の竪穴住居跡を主体にした居住域と、土器棺群で構成される墓域を検出した。本年度の調査区の中で最も注目される区域である。なお、本年度の調査では約70棟の竪穴住居跡を検出している。高松平野南部の弥生時代の集落跡を研究するうえで、大変貴重な資料となった。（西村）

地区	面積(m <sup>2</sup> )	施設名	7	8	9	10	11	12	1	2	3
II 区	1,430	管理棟		—————							
III 区	890	管理棟				—————					
IV 区	1,600	管理棟			-----						
V 区	1,700	北校舎	-----								
VI 区	997	機械棟・浄化槽					-----				
VII 区	3,434	体育館					—————				
VIII 区	1,290	プール								-----	
北水路	960	水路						-----			
南水路①	180	水路					-----				
東水路①～③⑤	560	水路	-----			-----					
合計	13,041		————— 1班				----- 2班				

第1表 鹿伏・中所遺跡平成6年度調査工程表

## 2. 遺跡の立地と環境

鹿伏・中所遺跡は、香川県の中部、三木町平木・鹿伏に所在する。西側は新川に接し、その新川は400mほど北で北西方向に人工的に流れを変える。東には「白山」がそびえ、それより西にのびる尾根が本遺跡と同時期の土壇墓群が所在する天神山となり、さらにその先かすかな微高地となった地点に遺跡は営まれている。現在では当時の地形はうかがいにくく南東から北西にわずかずつ低まる水田となっている。

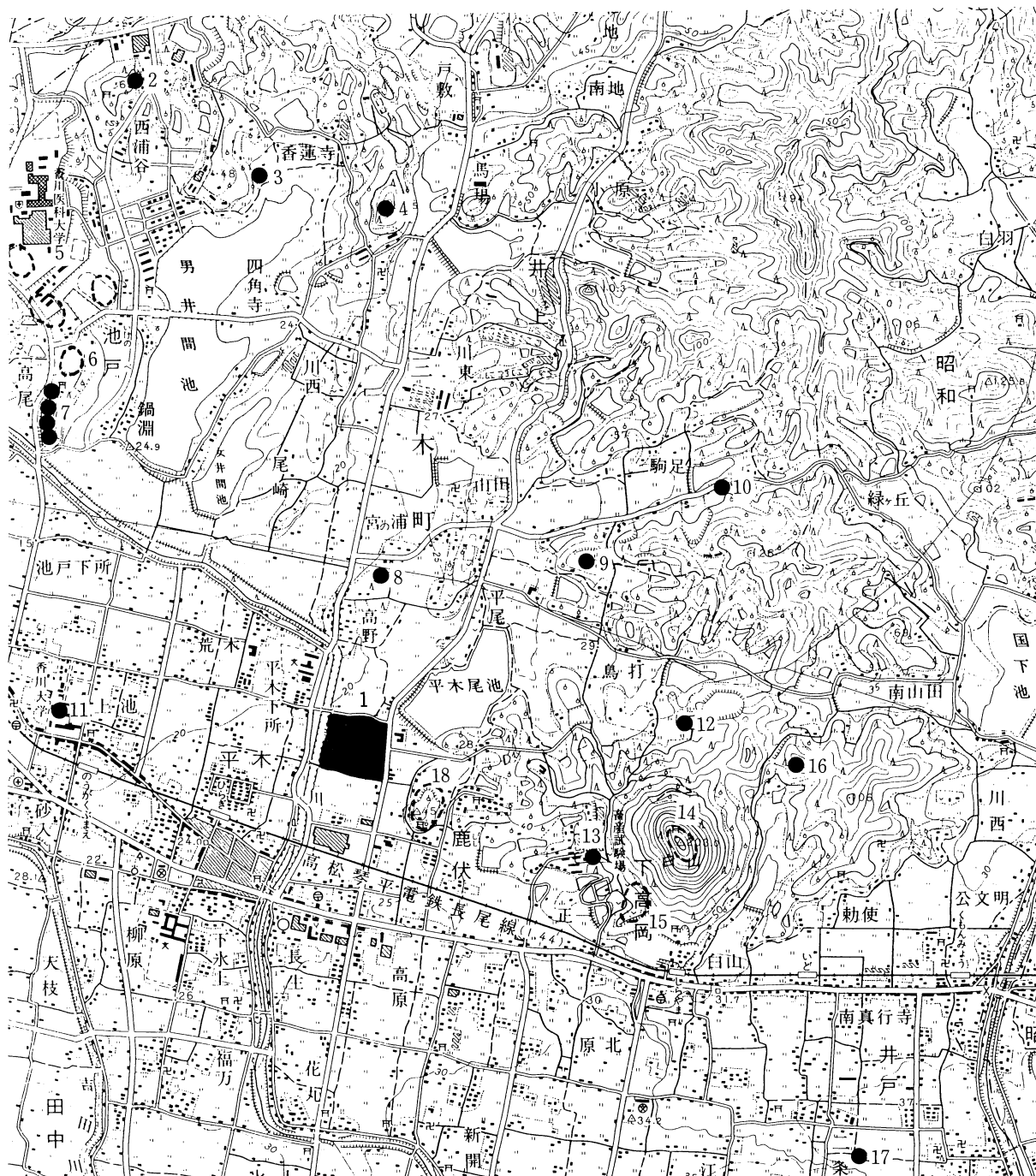
遺跡の所在する三木町は町中央部を平野部が東西に抜け、南半部及び北端付近を山塊が占める。南方の阿讃山脈前衛の山並みに源を発する吉田川、新川等の中小河川は中流域にあたる町中央部に沖積平野を形成した後、北部丘陵手前で流路を西に変更し西方の高松平野へと至る。この沖積平野はおおむね平坦地形をなしておりその形成過程および微地形復元には困難な部分も多い。しかし近年三木町内では調査件数が急増しており、この地域の遺跡の分布、展開等は現在急速に明らかにされつつある。

縄文時代以前については未だ明確ではないが、弥生時代前期には農学部遺跡や福万遺跡・鹿伏地区において新段階の土器が多量に出土している。農学部遺跡については平成4～6年度の県教育委員会による試掘・立会調査により敷地南半部に同時期の集落が展開している可能性が指摘されている。中期については白山3遺跡で竪穴住居跡7棟が検出されているほか、白山2遺跡で竪穴住居跡と箱式石棺がかつて調査され、また白山1遺跡から扁平鈕式の銅鐸が出土したことは著名である。さらに南方丘陵部の西土居遺跡でも多量の土器が出土している。後期には町内各所で遺物の出土が確認されており、鹿伏・中所遺跡や西土居遺跡等の拠点的な集落遺跡が調査されている。また後期から終末期にかけての墳墓群も北部丘陵側で石蓋土壇の検出された高尾遺跡、配石土壇などが確認された白山3遺跡、多くの土壇墓群からなる天神山古墳群などがあり、特に池戸八幡神社古墳群では1号墳が前方後円形のマウンドをもつ墳丘墓である可能性が指摘されており注目される。南部では方形台状墓で土壇を主体部とする山大寺池西丘上1号墓、小型の石室の可能性もある天満遺跡などが近年調査されている。

古墳時代については前期から中期前半にかけての古墳の内容が明確ではないが、中期後半の権八原古墳群が古式群集墳として著名であるほか、横穴式石室を主体部とし7世紀前半の築造と考えられる風呂谷古墳が調査されている。また鹿伏・中所遺跡東の天神山でも横穴式石室3基が最近調査され、多くの成果がえられた。それによると3基中1基の横穴式石室は追葬の際に墓道部を築きなおして石室の拡張を行っている。鹿伏・中所遺跡の北側には未調査であるものの単独で存在する円墳の高野八幡神社古墳が所在する。また高松市との境、男井間池を囲む丘陵地帯には破壊されたものを含めて群集墳が点在する。

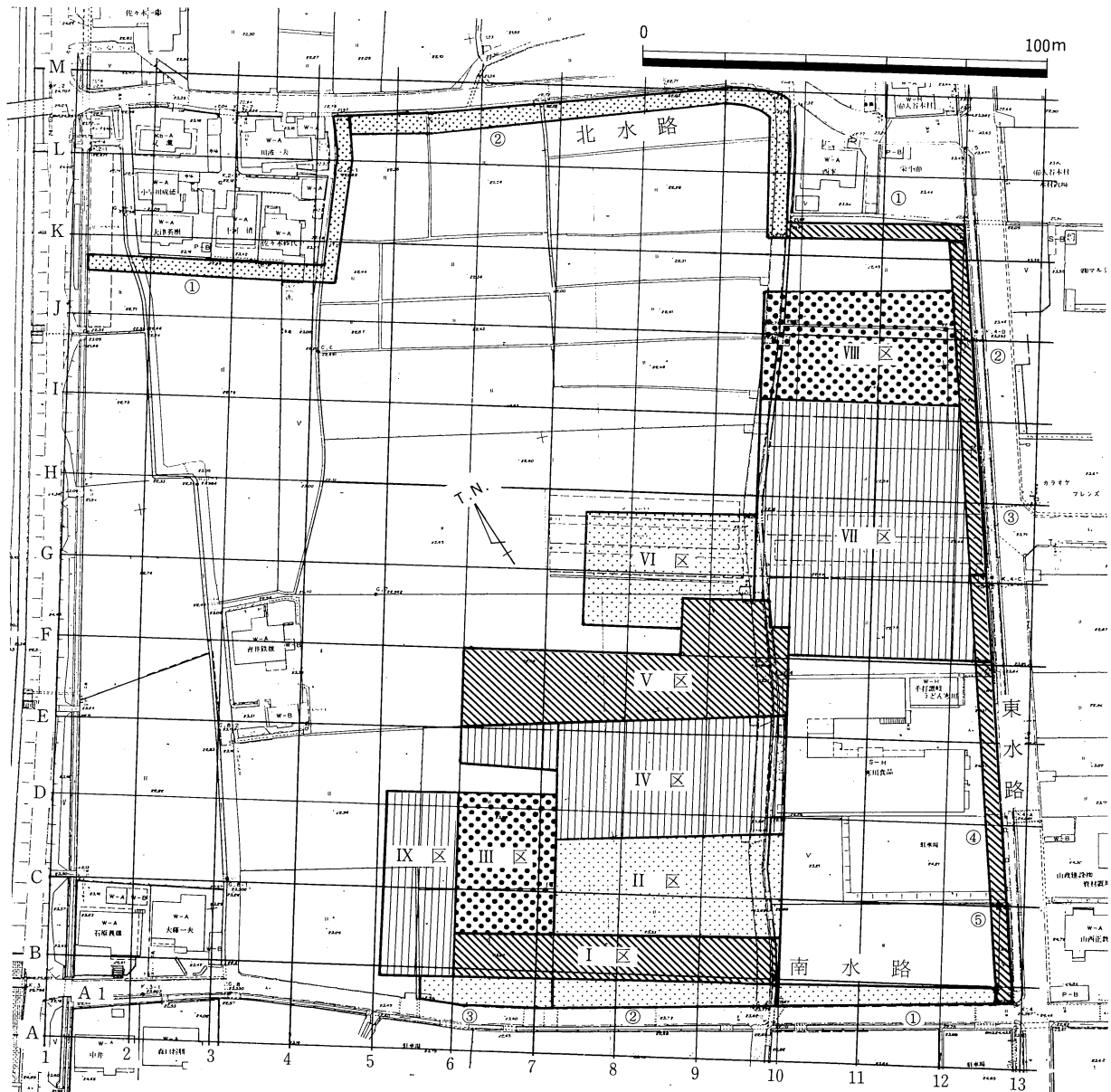
古代の遺跡は白鳳期から奈良時代にかけて相次いで建立されたと考えられる始覚寺、香蓮寺、上高岡廃寺、長楽寺などの古代寺院が知られるほか、同時期の集落遺跡も南天枝地区で確認されている。また北部丘陵の谷間では小谷窯跡が築かれ7世紀代に須恵器が焼かれている。すぐ近辺には同時期の塚谷古墳が存在しており、窯跡との関係が考えられる。 (古野)

(参考文献) 天神山古墳群地元説明会用資料 1994



- |              |             |            |
|--------------|-------------|------------|
| 1 鹿伏・中所遺跡    | 7 池戸八幡神社古墳群 | 13 白山1遺跡   |
| 2 五分一池古墳群    | 8 高野八幡神社古墳  | 14 白山2遺跡   |
| 3 香蓮寺跡       | 9 駒足古墳群     | 15 白山3遺跡   |
| 4 富士の越山頂古墳   | 10 鳥打古墳     | 16 狸地藏南丘古墳 |
| 5 権八原古墳群     | 11 農学部遺跡    | 17 妙頭古墳    |
| 6 池戸八幡神社裏古墳群 | 12 鳥打大谷西古墳群 | 18 天神山古墳群  |

第13図 鹿伏・中所遺跡及び周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第14図 鹿伏・中所遺跡調査区割図 (1/1,700)

(注：一辺20mのグリッド名は南と西の2本の線番号より与える。例：A1)

### 3. 調査の概要

調査対象面積15,391m<sup>2</sup>の内、本年度は13,041m<sup>2</sup>の調査を実施した。検出した遺構・遺物のうち少量古代・中世の遺構・遺物を含むが、主体を占めるのは弥生時代中期～古墳時代初頭までの集落遺構である。この集落は比較的規模が大きく住居跡の主体を占める竪穴住居跡は、約70棟を数える。

弥生時代中期の遺構・遺物は比較的少なく、II・IV～VIII区よりまばらに検出している程度であるが、II区の竪穴住居跡、V区の溝から出土した鉄製刀子、VIII区其自然河川の資料等が注目される。この集落が最も規模が大きくなるのが、次の弥生時代後期～古墳時代初頭の段階である。この時期、北辺水路を除く調査区のほぼ全域に集落は広がる。住居跡の主体をなすのは竪穴住居跡であるが、VII・VIII区周辺では掘立柱建物が20数棟検出された。竪穴住居跡との関係で

注目できる。なお、この時期には土器棺を主体部にした墓域がII区の東端を中心とした区域で確認された。

次に代表的な遺構・遺物を紹介する。

(西村)

## 4. 遺構・遺物

### (1) 弥生時代中期

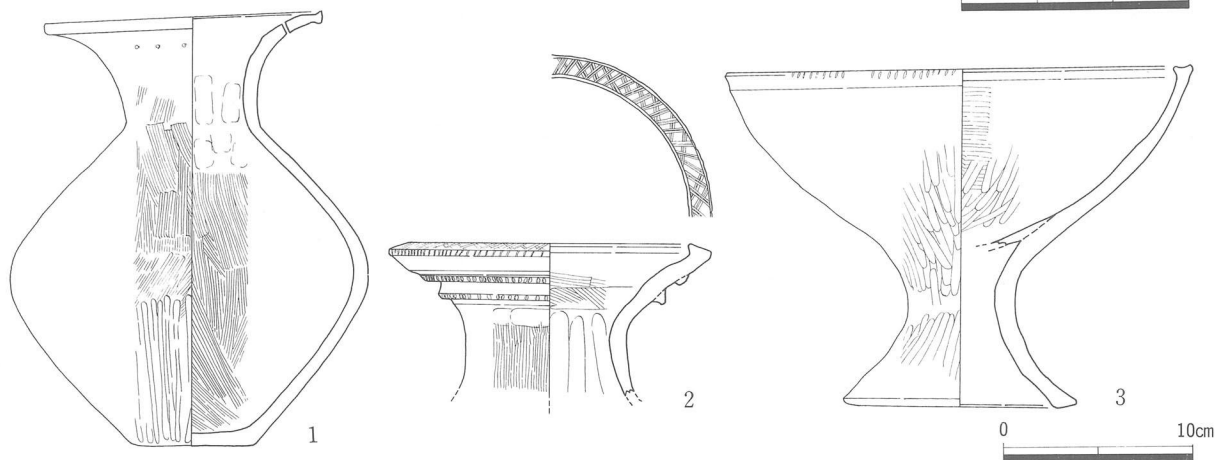
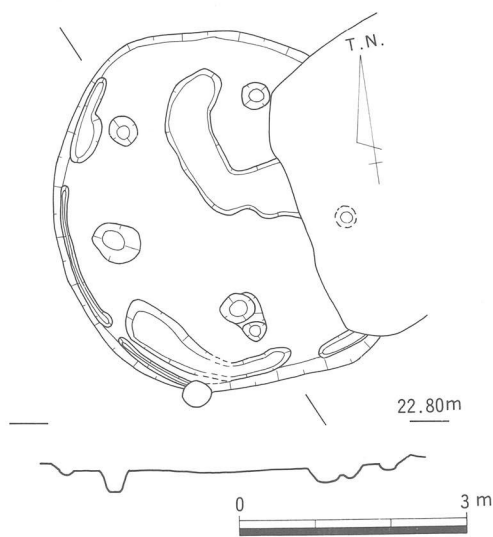
S H08 II区B・C7小区で検出した、長径約5.2mを測る、円形の竪穴住居跡である。東半部はS H10に切られている。主柱穴は5柱穴を検出し、住居の西半部には壁溝が巡る。床面には幅約0.6m、深さ約0.1mを測る幅広で浅い溝が検出された。なお埋土中には炭化物を含む。床面直上及び柱穴内より遺物が多量に出土した。

第15図1～3はS H08より出土した土器である。1・2は壺、1の体部は算盤玉状を呈し、口縁部は緩やかに外反し、端部は僅かに上下方向に拡張している。体部下半はヘラミガキ、上半はハケ、内面にはハケが顕著に認められる。口縁部に一単位三個の穿孔が一単位認められる。2は壺の口頸部である。口縁部外面に二条の貼り付け突帯、口縁端部に格子のヘラ描紋が顕著に認められる。3は鉢状の杯部を呈する高杯である。外面・内面共ヘラミガキを顕著に施している。杯部と脚台部の接合には、円盤充填手法が認められる。これらの出土遺物よりS H08の時期は、弥生時代中期中葉にあたる。

(西村)



写真17 S H08検出状況



第15図 S H08平・断面図 (1/100), 出土土器実測図 (1/4)

S P 154 V区E 7小区，調査区際で検出した。すぐ南をめぐる溝は後期のものであり，ピット単独の遺構である。ピット内には半分に壊れた壺が納められていた。土器の高さ・径とピットの大きさがほぼ一致するため捨てるだけのために掘ったとも考えにくい。壺は底まであったが，破片になっていたため上半分を図化した。外面には平行沈線と波状文を多量に描き込んでいるが，いずれも1本のヘラに4ないし5本の刻み目を入れたものを1つの単位としている。平行沈線は5本1単位のヘラを上から4周，2周，2周，3周させて描き，波状文は頸部のものが5本1単位のヘラを1周，下2つを4本1単位のヘラを1周させて描いている。図化しなかった下半部には文様はない。中期前葉のものとする。（古野）

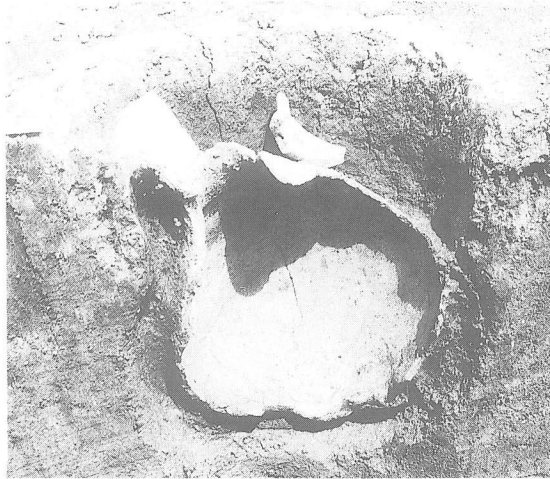
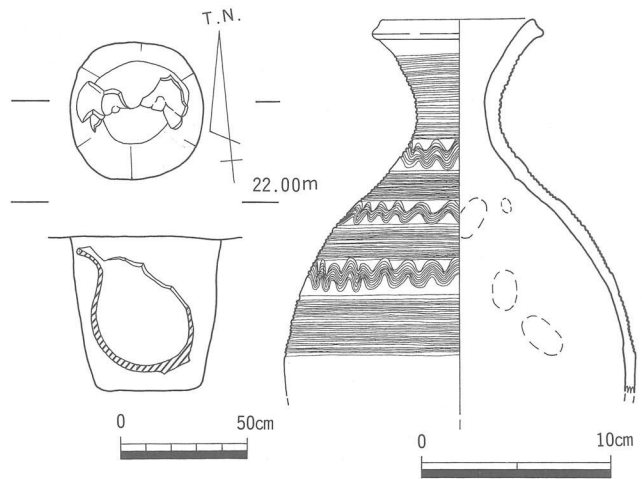
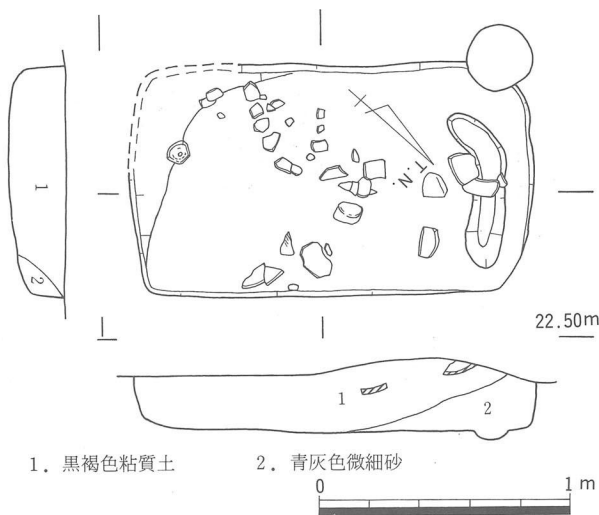


写真18 S P 154土器埋置状況



第16図 S P 154平・断面図 (1/30)，  
出土土器実測図 (1/4)

S K 07 IV区の南西部，II区との境近くで検出した。平面形が隅丸の長方形の土坑である。長さが1.6m，深さが約0.3mで，埋土は部分的に2層に分かれるが，基本的には黒褐色粘質土の単層であった。中期前葉の土器片と石包丁が出土した。土器片は摩滅し，埋土表面近くから土坑の底直上までの深さに分布している。土坑の底には北西辺に沿って深さ5cm程度の掘り込みがある。平面形や底面の形がしっかりしており土壌墓とも考えられるが，上述のような土器の



第17図 S K 07平・断面図 (1/30)



写真19 S K 07土器出土状況



出土状況や埋土の状況から現時点では土坑としておく。

S D15 IV～V区の西部で検出した。最大幅0.9m、深さ0.6mの溝である。埋土は2層にわかれ、上層から土器がまとまって出土した。埋没し溝として使われなくなった段階で土器捨て場になったものと考えられる。1は壺の口縁部である。複合口縁状になっており凹線を4条引いている。ヘラを連続して押圧した突帯文が頸部にめぐる。2は甕の口縁である。口縁端部が上にのび、外面に凹線文を描く。内面にヘラ削りは認められない。3は大形の深鉢の口縁である。上平端部には凹線文、外面には沈線を描く。いずれも中期後葉頃の土器である。この他中期前葉の土器もごく少量混じっていた。4は鉄製の小刀である。土器同様上層から出土した。関はない。柄の部分には木質が残存している。県内で最も古い段階の鉄器であり、ほかには高松市久

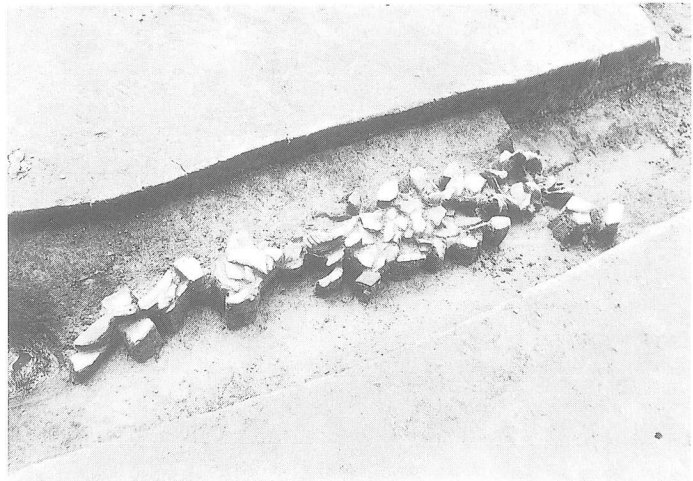
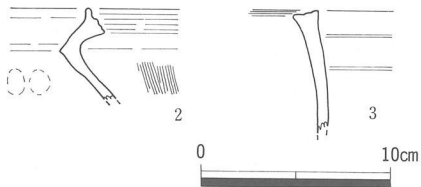
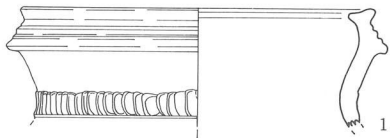
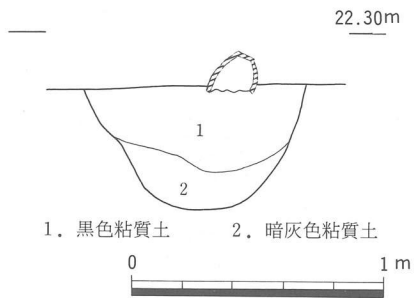
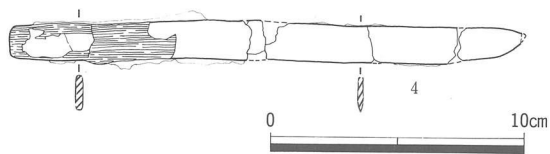


写真20 S D15土器出土状況



第18図 S D15断面図 (1/30), 出土土器実測図 (1/4) ・鉄器実測図 (1/3)

米池南遺跡、坂出市烏帽子山遺跡、丸亀市心経山遺跡、詫間町紫雲出山遺跡など数例が知られるのみである。S D15より西では遺構が疎らになることから、S D15はこの時期の集落の西境としての溝と考えたい。(古野)

(2) 弥生時代後期～古墳時代初頭

S H23 IV区の北部、D 8小区で検出した。径7.5mの円形の竪穴住居跡である。柱穴は6本で、柱穴の大きさの違いから大きめの4本の柱で基礎を組みそのささえ程度の柱を2本配していると考えられる。大きい4つの柱穴の中からはいずれも土器片が出土した。接合して完形になる土器片はない。柱穴の中央

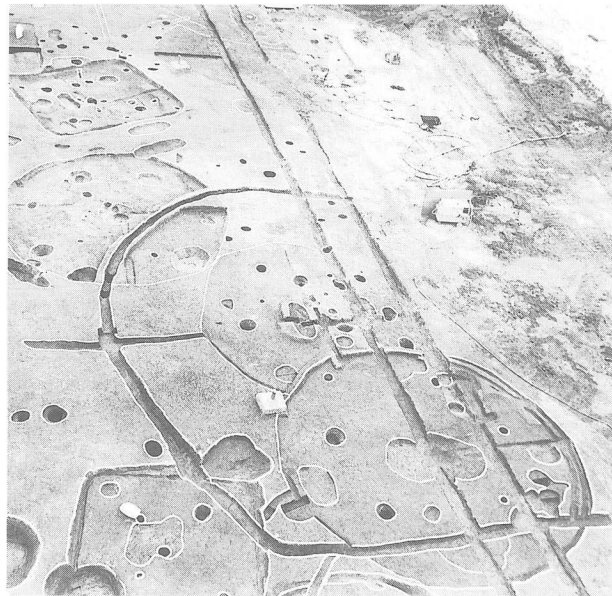
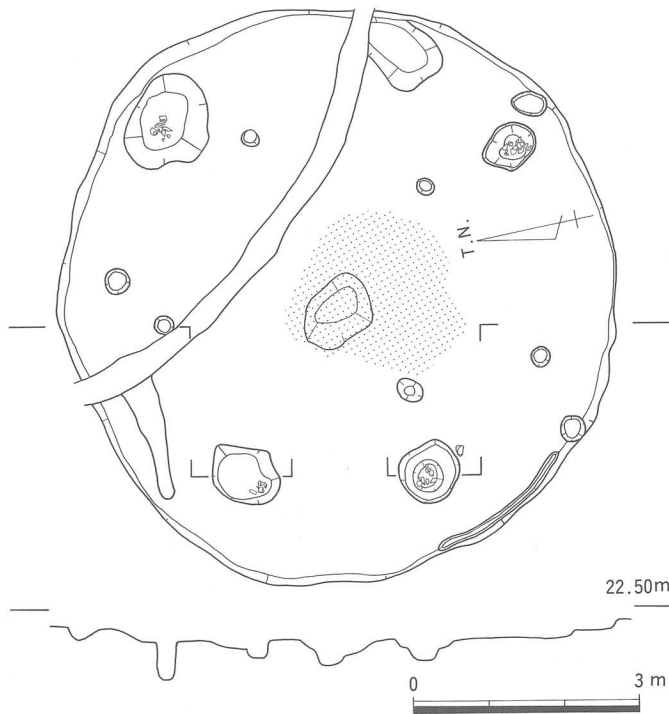


写真21 S H23等竪穴住居跡検出状況



第19図 SH23平・断面図 (1/100),  
出土土器実測図 (1/4)

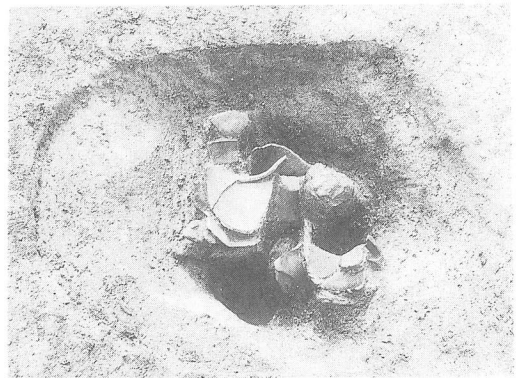
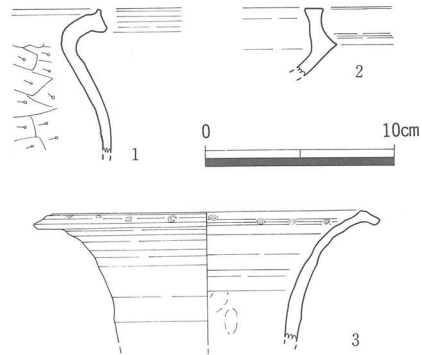


写真22 SH23柱穴内土器出土状況

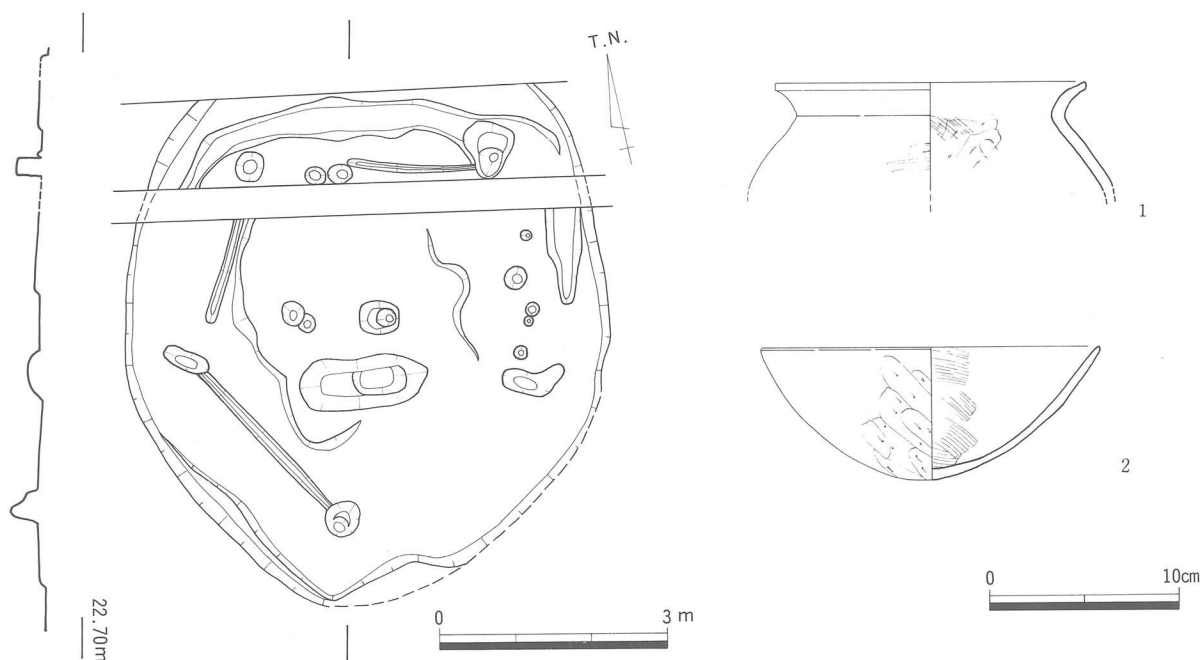
で出土したことから、この住居を使わなくなるに際して柱を抜き去り土器片を入れ込んだことが想定される。このような状況は他にもいくつかの住居跡で認められ鹿伏・中所遺跡ではある程度の時期幅のなかで行われていたようである。住居中央には深さ40cmの円形の土坑が掘り込まれていた。炉と考えるが中は少量の炭化物を含む青灰色微細砂（床面と同じ土）で埋まっていた。また図面内中央の網をかぶせた部分に炭化物が薄く広がっていた。このことから炉内につまっていた炭を周囲にかきだしたことが考えられる。とすればそれは柱穴に土器を投げ込んだのと同時期かもしれない。壁溝は一部のみ認められた。1は甕である。口縁には凹線が入る。内面は頸部直下までヘラ削りを行い、外面には煤が付着していた。2は高杯の口縁部である。3は壺の上半部である。外面には凹線が引かれ、口縁内外面に竹管文を入れている。これらの土器から後期前半の竪穴住居跡と考える。 (古野)

SH05 II区C7小区で検出した、長径約7.0mを測る、隅丸の五角形状の竪穴住居跡である。主柱穴は平面五角形状のコーナーに配され、5柱穴を確認した。柱穴は比較的残りがよく径約0.4m、深さ約0.4mを測る。また、床面上の三辺の主柱穴間には壁溝が巡る。なお、床面上には南寄りの位置に、東西主軸で長楕円形状の炉跡が検出された。長さ1.7m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。



写真23 SH05検出状況

第20図1・2はSH05より出土した土器である。1は甕の上半部である。口縁部は尖り気味に外反し、体部外面に叩き、内面にはヘラケズリが認められる。2は鉢である。体部外面はヘラケズリ、内面はハケが顕著である。これらの出土遺物よりSH05の時期は、弥生時代後期末前後と考える。 (西村)

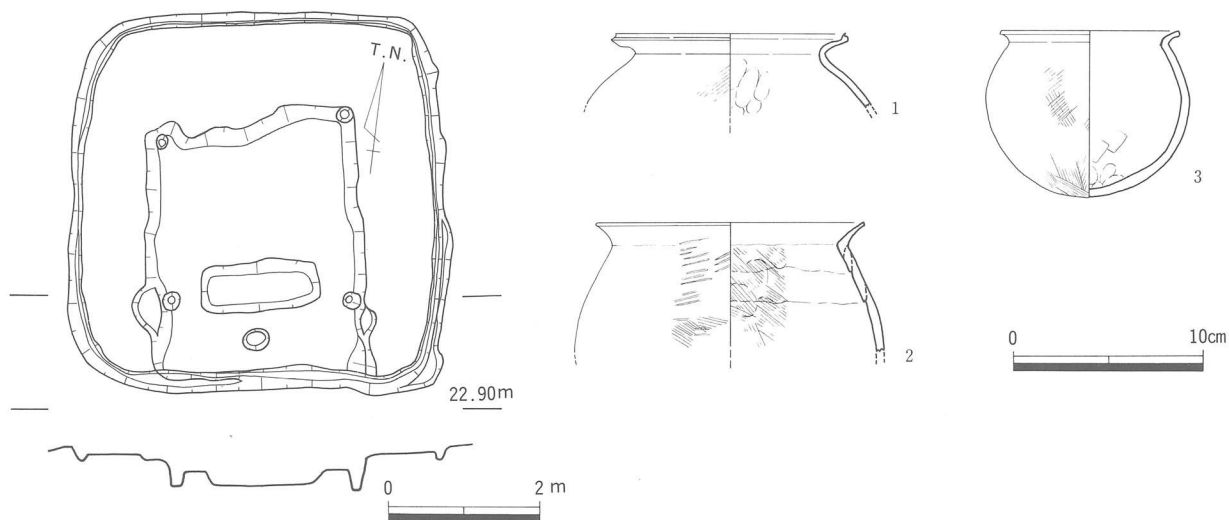


第20図 SH05平・断面図(1/100),出土土器実測図(1/4)

SH03 II区C8小区で検出した,長径約5.0mを測る,隅丸方形の竪穴住居跡である。南面を除く3辺には幅約1.0m,高さ約0.2mを測るベット状遺構が「コ」の字状に配される。なお,このベット状遺構は盛り土により形成している。支柱穴はベット状遺構の下端部で4柱穴を検出した。支柱穴は小型で径約0.2mを測る。床面には南寄りの位置に,東西主軸で長楕円形状の炉跡が検出された。長さ1.6m,幅0.7m,深さ0.2mを測る。床面上には薄い炭層が広範囲に堆積していた。なお,住居跡外縁に幅の狭い壁溝,ベット状遺構の下端部の東・西辺には幅の狭い壁溝が南北に配されている。



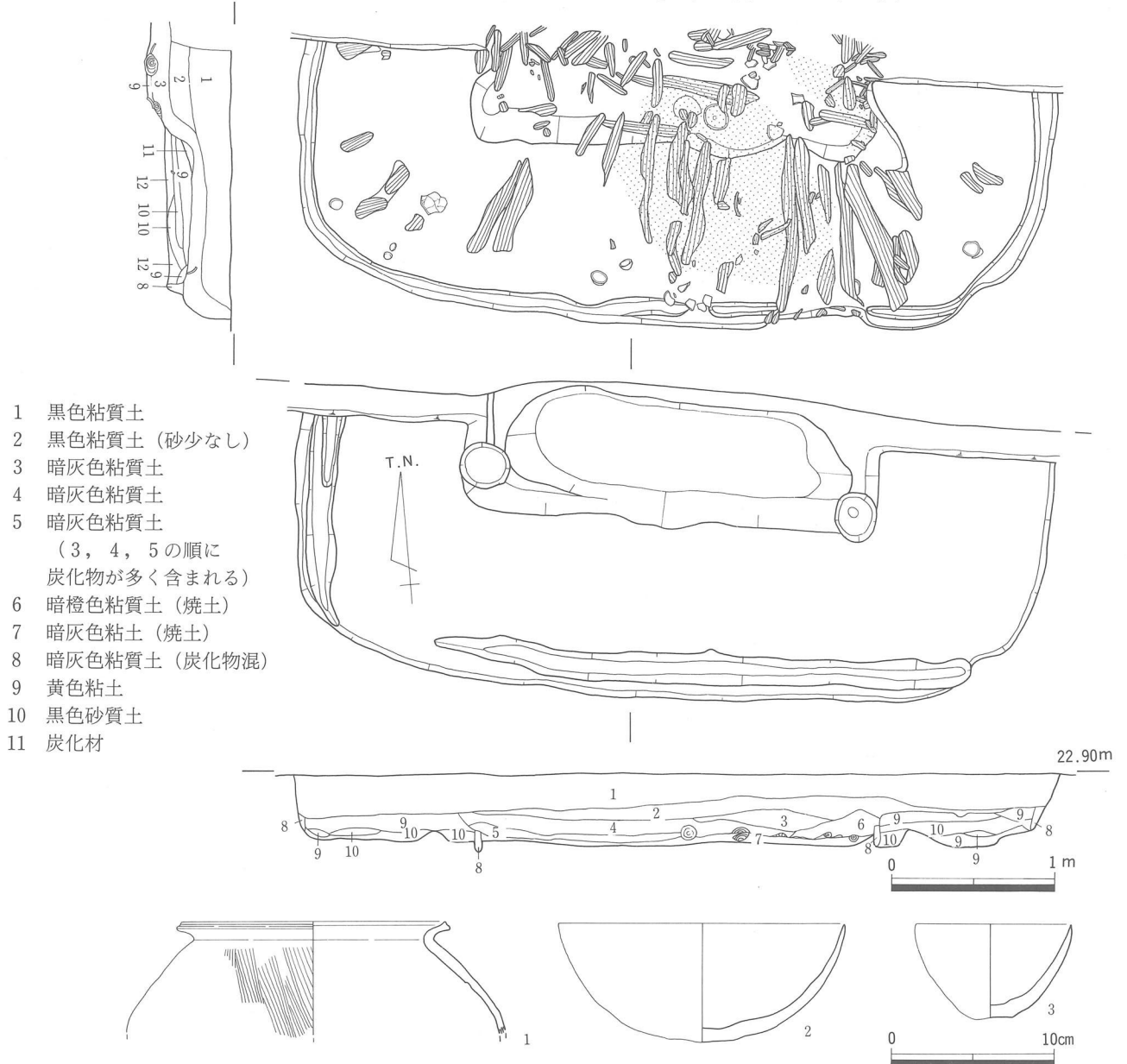
写真24 SH03検出状況



第21図 SH03平・断面図(1/100),出土土器実測図(1/4)

第21図 1～3はSH03より出土した土器である。1・2は甕の上半部である。1は形態・手法より「所謂」東阿波型に類似する。2の体部外面には幅の細い叩きを施している。1は炉，2はベッド状遺構より出土している。3は小型の甕である。体部は球形化し口縁端部は尖り気味に外反する。これらの出土遺物よりSH04の時期は，古墳時代初頭頃と考える。（西村）

SH67 南水路の東部，A10～11小区で検出した。調査区外にまたがるため，全体の半分以下しか調査できなかった。一片の長さ4.6mの方形で柱穴は4本あると考えられる。この竪穴住居は焼失家屋であり，炭化材の残存状況もよい。以下判明した事実を箇条書きに述べる。①炉は南側のベッド状遺構に接するため，入口は北の可能性がある。②炉内には藁状の炭が広がり，炉面は焼けていなかった。③炉の周囲では甕（1）と中型の鉢（2）が出土し，ベッド状遺構上からは数点の小型の鉢（3）が出土した。④炉周囲及びベッド状遺構の上に敷物が敷かれていた痕跡はなかった。⑤垂木は梁にもたせ掛けられていた。梁は斜めに上下2段になっていた



第22図 SH67炭化材出土平面図・掘り形平面図・断面図(1/40)，出土土器実測図(1/4)



写真25 S H 67炭化材検出状況



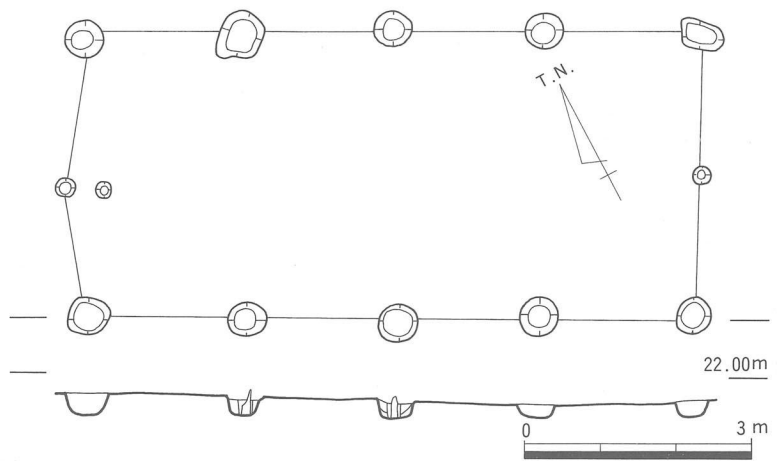
写真26 S H 67炉内土器出土状況

のか2本平行して検出された。⑥垂木は径7~10cmの木を半截し、平たい面を下にしていたことが、垂木の断面から見て取れた。⑦梁は径12cmの木、主柱には径10cmの木を使用していた。出土した炭化材にはその他径12cmの木を1/4に割ったと考えられるものも存在した。⑧垂木は密な状態で並べられていた。⑨垂木の上には厚さ10cmほどの均質な灰色粘質土がおおいかさり(図面上の網範囲)、更にその上に薄く炭化物がかぶさっていた。このことから灰色粘質土は屋根に葺いた土、炭化物はその上に葺いた藁か何かと考える。他の地点では焼土塊も出土している。⑩主柱とベッド状遺構下の壁面にはさまって壁面に沿うように横方向に木目の走る木の痕跡を検出した。壁溝内からも炭化物が検出された。このことから壁面には上下とも板を挿んでいたと思われる。⑪ベッドを作るにあたっての最初の掘り形は工具痕による凹凸が激しく、その上に砂質土を咬ませ更に上に掘りあげた粘土を貼っている。⑫出土した土器から弥生時代終末に建てられたものと考えられる。(古野)

参考文献：深澤敦仁「竪穴住居の屋根葺代について」同志社大学考古学シリーズV 1992  
S B 04 VII区J 10小区で検出した、4間(8.1m)×2間(3.8m)、面積31m<sup>2</sup>を測る東西棟の掘立柱建物である。柱間は桁行

1.9~2.0m、梁間1.9~2.1mを測る。柱穴掘形は円形ないしは不正円形を呈し、径約0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は灰黒色系の粘質土。五つの柱穴で柱材が確認された。出土遺物としては弥生土器が少量出土しただけで詳細な時期については問題を残すが、弥生時代後期後半以降にあたる可能性が高い。(西村)

S D 07・08・27~30 III区西半部B・C・D 6小区で検出した、南北主軸をとる比較的大型の溝群である。この



第23図 S B 04平・断面図(1/100)

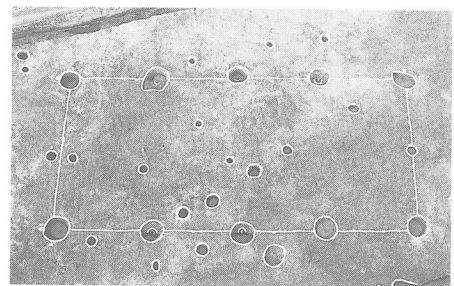
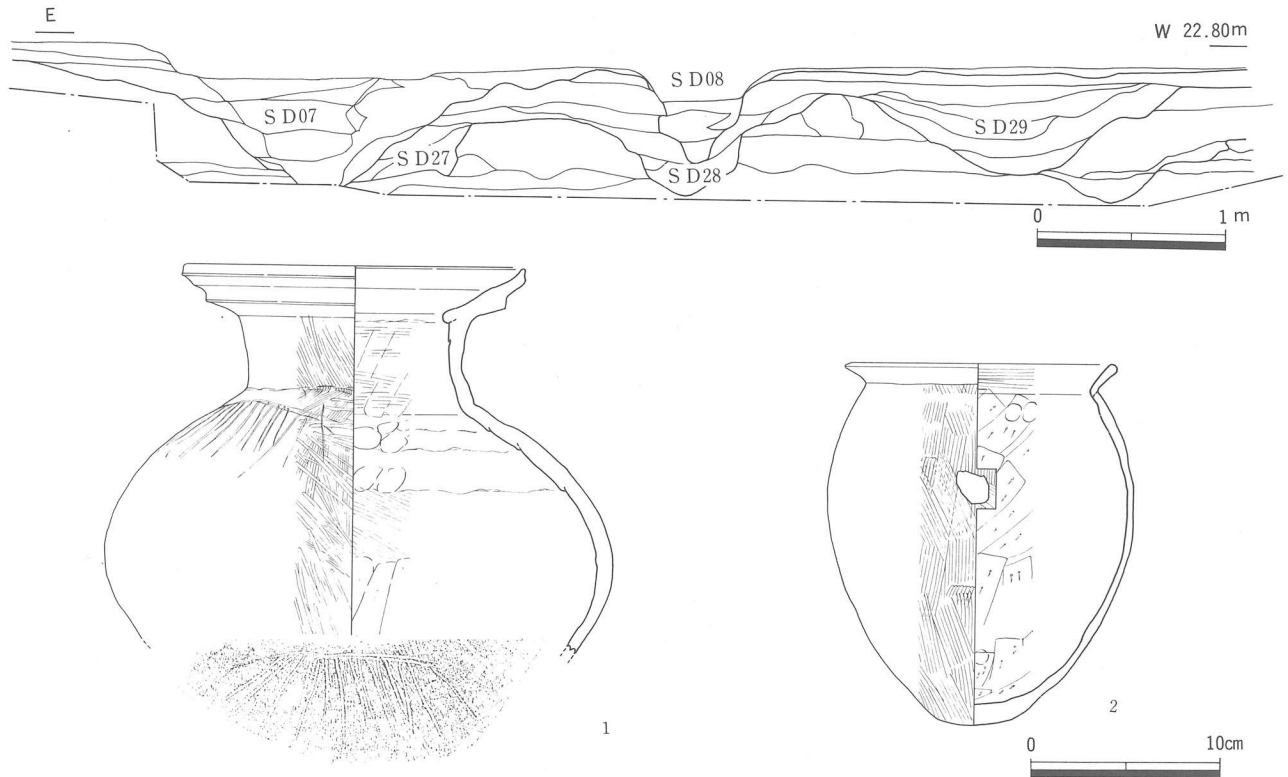


写真27 S B 04検出状況



第24図 S D07・08・27～30断面図（1／40），出土土器実測図（1／4）

地域は本来自然河川が流れていた地域で、これらの溝群は、河川がある程度埋没した段階で配された溝群である。なお、これらの溝群の中には埋没後改修を行なった溝も認められる。S D27・28である。この二つの溝の上位には埋土が細砂からなるS D07・08が配されていた。

これらの溝群の中で最も規模が大きい溝はS D27である。この溝は、最も東に位置し、僅かに蛇行しながら北進する。検出長約37.0m、幅約4.0m、深さ約1.2mを測る。断面逆台形状を呈し、埋土の主体をしめるのは淡黒色系のシルトである。



写真28 S D27～30全景

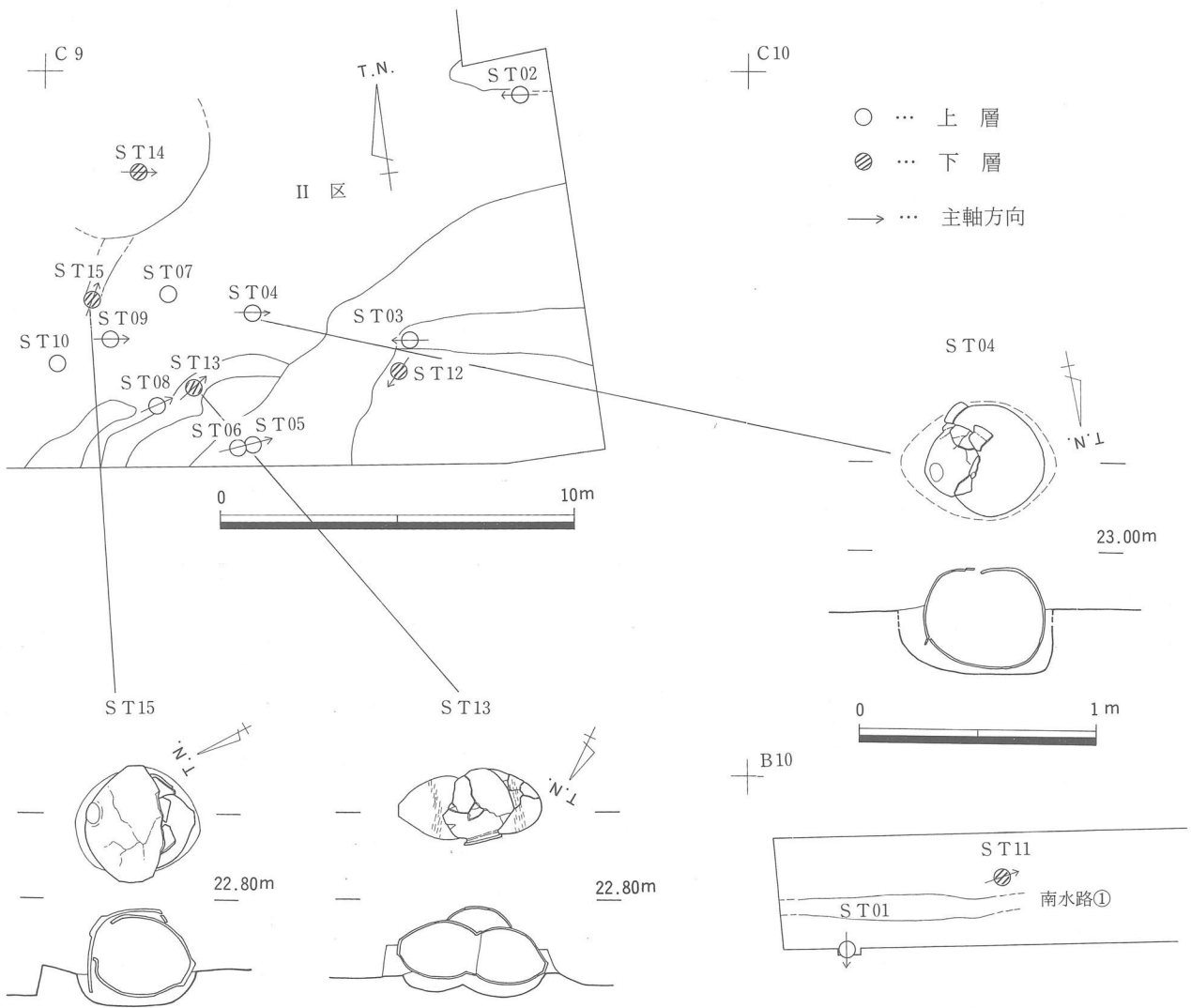
S D27からは大量の遺物が出土している。特に東西方向の溝と合流する北端部のC・D6区が顕著である。

S D28～30は、S D27から分岐するように西に方位をかえている。最も東に位置するのがS D28で次いでS D29、最も西に位置するのがS D30である。方向もS D28より30に移るにしたがい僅かに西に方位をずらす。S D28は断面U字状を呈し、幅約2.0m、深さ約1.2mを測る。S D29は断面浅い皿状を呈し、幅約3.2m、深さ約1.0mを測る。S D30はごく一部が調査区にかかっているだけで詳細な点は不明である。

これらの溝群からは合計98箱の遺物が出土している。出土している土器には時期幅がかなりあるが、主体を占めるのは弥生時代後期後半より後期末前後の遺物である。そのためこれらの溝群も概ねこの時期に該当するものとする。

第23図1・2はS D27より出土した土器である。1は壺の上半部である。体部は球体化し頸

部は直立気味に延び口縁部は外上方に開く。体部外面にハケとミガキ，内面は上半部にハケ，下半部はヘラケズリを施している。なお，体部外面にはヘラ描きによる線刻画が認められる。何を意図した絵画か明確にしがたいが，「家」を意図した可能性がある。2は甕である。底部は僅かに丸みをもち，口縁部は直線気味に外反する。体部外面縦方向のハケ，体部内面ヘラケズリ口縁部内面横方向のハケを施している。なお，体部中央には焼成後の穿孔が認められる。  
(西村)



第25図 ST01~15配置図 (1/200) , ST04・13・15平・断面図 (1/30)

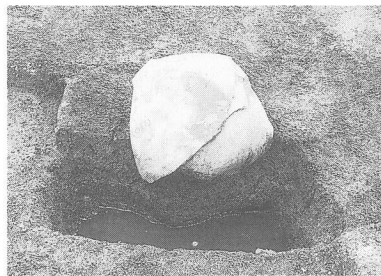


写真29 ST15検出状況

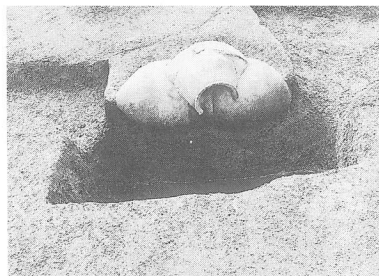


写真30 ST13検出状況

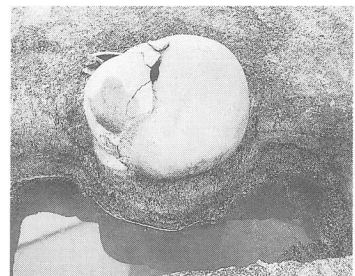


写真31 ST04検出状況

S T 01～15 II区東端部より、南水路①区の西端部にかけての区域では、土器棺を主体部にする墓が15基検出された。検出面は弥生時代の包含層を挟んで上・下二面検出された。上位の検出面より10基、下位の検出面より5基検出している。検出された土器棺は、棺と蓋との関係で様々なタイプに分かれる。代表的なものでは①棺が大型の壺の口頸部を打ち欠いたもので、蓋が鉢（第25図S T 04）②棺が大型の壺の口頸部を打ち欠いたもので、蓋が大型の壺の上半部を打ち欠いたもの（第25図S T 15）③棺が壺の口頸部を打ち欠いたもので、蓋が甕の上半部を打ち欠いたもの⑤単体の大型壺等のタイプがある。特異なもので、二つの甕を合わせ口でもちい、その接合部分の上位に甕を縦割りにして被せてある土器棺（第25図S T 13）など様々である。主軸方向は数方向に別れるが、15基の土器棺中10基の土器棺が、東ないし北東方向に主軸を揃えている。検出された土器棺の形状より、下位の土器棺は弥生時代後期後半頃、上位の土器棺は弥生時代後期末前後の時期にあたる。なお、この区域よりかなり離れるがⅦ区の南端部では、ほぼ同時期の土器棺1基を検出している。（西村）

## 5. まとめ

本年度の調査成果を簡単にまとめる。

本年度の調査で検出した遺構・遺物は、弥生時代中期～古墳時代初頭までの集落遺構が主体を占める。集落は「白山」から延びる舌状の低微高地上に立地し、南北160m、東西140mの範囲で確認された。対象地外の状況についてのデータはないが、調査区の遺跡内容より、集落範囲はより東方に広がるものとする。住居跡の主体を占めるのは竪穴住居跡であり、その数は約70棟を数える。また、弥生時代後期後半～後期末の段階では土器棺を埋葬施設とする墓域も確認した。これらの集落規模及び遺跡内容より、本遺跡は当該地周辺の一拠点集落と考える。

弥生時代中期の遺構・遺物は比較的少なく、Ⅱ・Ⅳ～Ⅷ区より、まばらに検出している程度である。傾向としては中期前葉より中期後葉にかけて遺構・遺物共に増加する傾向がある。代表的な遺構ではⅡ区の中期中葉の竪穴住居跡S H 08、Ⅴ区の中期後葉の溝S D 15、Ⅶ区 of 自然河川S R 03等があげられる。

S D 15はⅣ区からⅤ区の西縁にかけてほぼ直線状に南北に配されており、この溝の西側には同時期の遺構はみられない点より、中期後葉の集落の西限を画する溝の可能性はある。なお、この溝からは県内でも初現期の鉄製刀子が出土しており注目される。詳細に報告していないが、Ⅷ区 of 自然河川S R 03からは、中期前葉～中葉の遺物が多量に出土している。特に木製品及び自然木が多量に出土した点が注目される。特徴的な木製品では弓、広鋏、横槌、杵等があげられる。なお、S R 03は、概ねこの時期に埋没し、湿地状を呈する。

次の弥生時代後期～古墳時代初頭の段階になると、集落規模はさらに大きくなり、北水路を除く調査区のほぼ全域に集落は広がる。住居跡の主体をなすのは竪穴住居跡である。遺物の整理ができていないので、正確に把握していないが、全ての竪穴住居跡の約8割はこの時期にあたるものとする。後期前半の竪穴住居は、径6～7mの円形で柱穴を六本もつものが主流であるが、少数多角形の竪穴住居跡も含まれる。なお、住居のまわりに周溝を配するS H 23等の例もみられる。後期後半～後期末の竪穴住居跡は、円形・隅丸方形・多角形などの諸形態がある。隅丸方形の住居跡は、一辺4～5mで揃うが、ベッドを持つものと持たないもの、ベッドが四辺にあるものと三辺にあるものなど内容は様々である。焼失家屋も多く含まれ、残りの良



いものには、上屋構造や住居内の空間利用方法などをあきらかにできるSH67等の良好な資料も存在する。

Ⅶ・Ⅷ区周辺では掘立柱建物を20数棟検出した。地形に規制されたものと考えられ、東西棟が主体を占めるが、Ⅶ区南端では南北棟の総柱建物も検出している。これらの掘立柱建物は、竪穴住居跡との関係が今後の課題になる。

Ⅱ区東端より南水路にかけて15基の土器棺群を検出している。掘り込み面に高低差があるため、ある程度の時期幅をもって形成されたものと考えられる。また、この墓

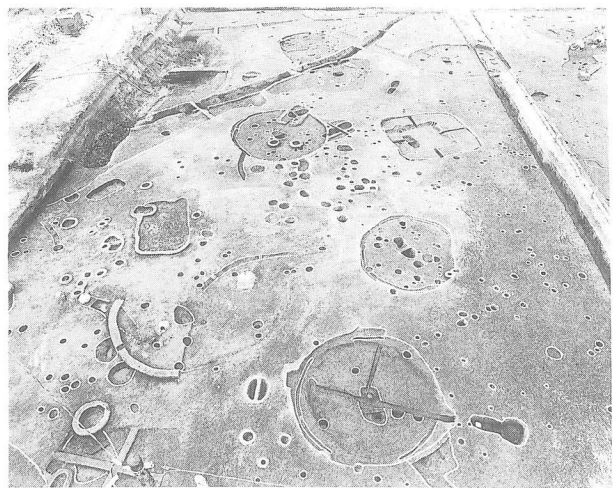
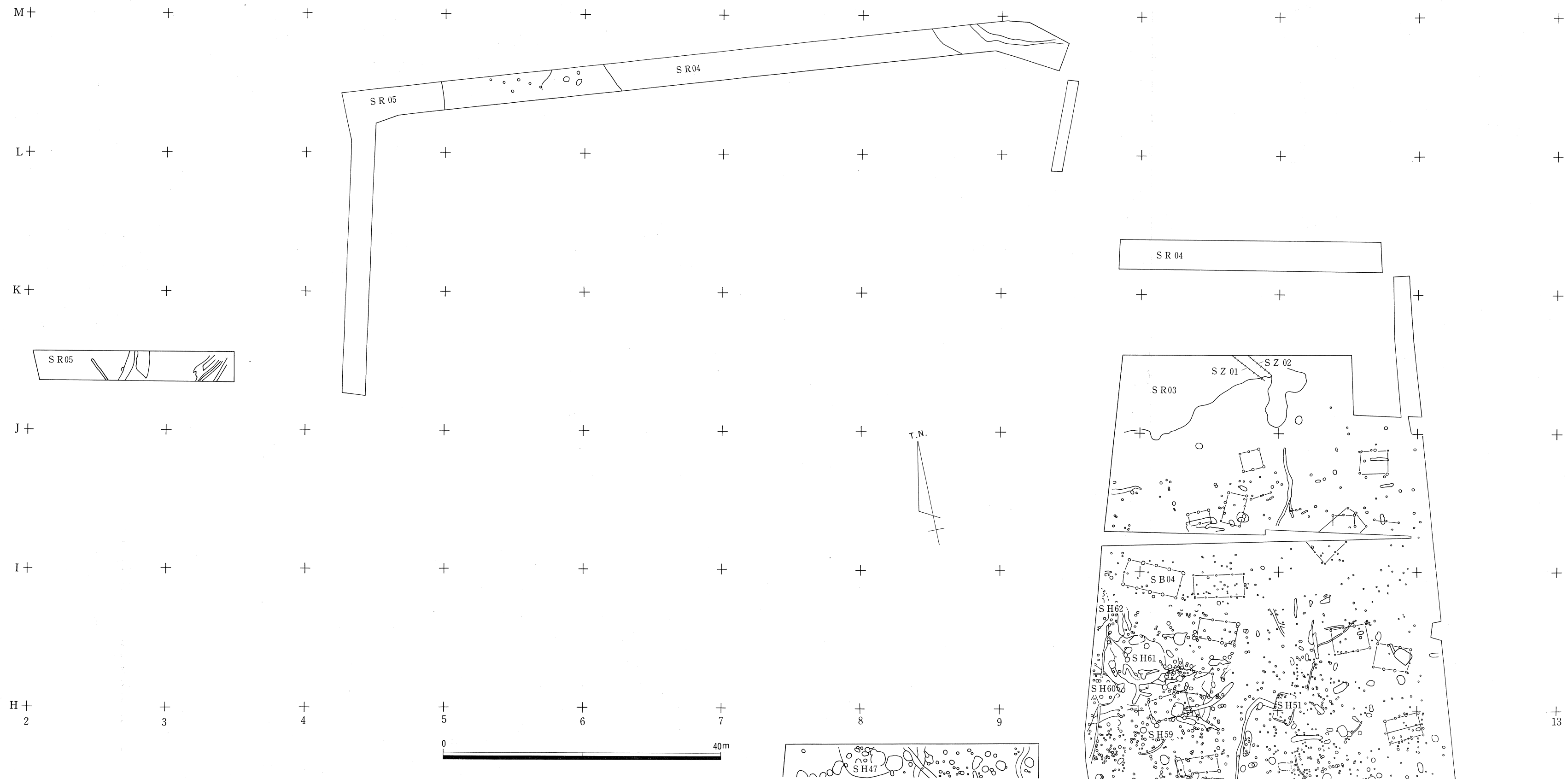


写真32 Ⅱ区全景

域から離れてⅦ区においても土器棺1基を検出した。両地区共に、長方形に掘り込まれた土坑が、周辺に分布し、これらも「墓」の可能性もある。なお、これらの土器棺は主軸を東に向けてるものが主体を占める。その方向には弥生時代中期の銅鐸を出土した「白山」が位置し、大変興味深い。当該期の自然河川はⅢ・Ⅷ区、北水路、東水路等で数条検出した。Ⅷ区のSR03は、この時期すでに埋没しており湿地状を呈している。詳細には報告していないが、その上面で平行してのびる二条の杭列等からなるSZ01・02を検出した。時期的には、弥生時代後期以降のものである。状況よりこの遺構は道状遺構あるいは畦状遺構の可能性を持つ。Ⅲ区の自然河川SR02は南北方向に流れる大型の自然河川である。この河川がある程度埋没した段階で、その上位にSD07・08・27～30が配される。溝群の性格については今後の課題になるが、概ねこれらの溝群が、該期の集落の西限になる可能性は高い。(西村, 古野)

調査区	遺構名	形状	規模(長×短×深) m	施設	備考	旧遺構名
II区	SH01	円形	5.0×4.0×0.2	炉・壁溝	焼失家屋, 主柱穴2 焼失家屋, 主柱穴7 主柱穴5 主柱穴7	SH02
	SH02	円形	径5.1深さ0.2	炉・壁溝・張り出し		SH03
	SH03	隅丸方形	5.0×5.0×0.3	炉・壁溝・ベッド		SH04
	SH04	円形	6.2×5.5×0.2	炉・壁溝・排水溝		SH05
	SH05	隅丸五角形	7.0×6.5×0.3	炉		SH06
	SH06	不整円形	5.2×3.2以上×0.2	壁溝		SH07
	SH07	不明		炉		SH08
	SH08	円形	径推定5.7深さ0.1	炉		SH09
	SH09	隅丸方形	4.4×3.7以上×0.2	炉		SH10
III区	SH10	円形	径推定7.1深さ0.2	炉・壁溝	多角形の可能性有り 焼失家屋, 焼土面有り	SH01
	SH11	隅丸方形	4.5以上×4.3×0.1	炉・壁溝		SH02
	SH12	隅丸方形	3.7以上×3.2以上×0.1			SH03
	SH13	隅丸方形	4.0以上×不明×0.1			SH04
	SH14	多角形?	3.8以上×2.0以上×0.1			SH05
	SH15	円形	径推定7.1深さ0.1未満	炉・壁溝		SH06
	SH16	隅丸方形	3.0以上×3.0以上×0.1			SH07
IV区	SH17	円形	径7.0	炉・壁溝	焼失家屋, 主柱穴なし 焼失家屋 主柱穴内に土器 主柱穴内に土器 炉内に土器 主柱穴内に土器 主柱穴内に土器	SH01
	SH18	隅丸方形	4.0以上×4.0×0.1	炉・壁溝		SH02
	SH19	隅丸方形	4.2×4.0×0.1	炉・壁溝		SH03
	SH20	隅丸方形	径7.7深さ0.2	炉・壁溝(2重)		SH04
	SH21	隅丸方形	5.0×4.4×0.2	炉		SH05
	SH22	円形	径7.0深さ0.1	炉・周溝		SH06
	SH23	円形	径7.4深さ0.2	炉		SH07
	SH24	隅丸方形	6.0×5.8×0.1	炉・壁溝・張り出し		SH08
	SH25	円形	径5.6深さ0.1	炉・張り出し		SH09
	SH26	隅丸方形	6.0×5.4×0.3	炉		SH10
	SH27	円形	径6.0深さ0.1	炉・壁溝		SH11
	SH28	不明		炉		SH12
	SH29	隅丸五角形	7.0×7.0×0.1	炉		SH14
	SH30	円形	径5.0深さ0.1	炉		SH15
	SH31	円形	径7.6深さ0.2	炉・張り出し		SH16
SH32	不明		炉	SH17		
SH33	不明		炉	SH18		
V区	SH34	隅丸方形	5.3×5.3×0.1	炉・壁溝・ベッド	焼失家屋 焼失家屋 主柱穴5 主柱穴内に土器 主柱穴5	SH01
	SH35	隅丸方形	6.0×5.5×0.2	炉・壁溝・ベッド・張り出し		SH02
	SH36	円形	径5.5深さ0.1	壁溝・張り出し		SH03
	SH37	円形	径5.6深さ0.1	炉・壁溝・貯蔵穴		SH04
	SH38	不明	5.0以上×5.0×0.1未満	炉		SH08
	SH39	不明		炉・壁溝		SH10
	SH40	不明		炉		SH11
	SH41	不明		炉		SH12
VI区	SH42	円形	径4.6深さ0.1	炉・壁溝	焼失家屋 主柱穴なし? 焼失家屋, 主柱穴2 建替え1回 焼失家屋 平地住居?, 焼失家屋	SH01
	SH43	隅丸方形	5.3×3.0以上×0.1			SH02
	SH44	隅丸方形	4.0×3.3×0.1	壁溝		SH03
	SH45	円形	径7.4深さ0.1	炉・壁溝		SH04
	SH46	円形	径6.0深さ0.2	炉		SH05
	SH47	円形	径8.0深さ0.1	炉・壁溝		SH06
	SH48	不明		炉		SH07
	VII区	SH49	隅丸方形	3.8×3.1×0.2		壁溝
SH50		円形	3.7×3.2×0.1未満	炉・壁溝	SH02	
SH51		隅丸方形	4.1×2.6×0.1	壁溝	SH04	
SH52		不明			SH05	
SH53		不明			SH06	
SH54		不明		炉?	SH07	
SH55		円形	4.6×4.1×0.1未満	炉・壁溝	SH08	
SH56		不整円形	径約5.6深さ0.1未満	壁溝	SH10	
SH57		円形	7.5×6.0×0.1未満	壁溝	SH11	
SH58		円形	径4.8以上深さ0.1		SH12	
SH59		円形	径6.0深さ0.1未満	炉・壁溝	SH13	
SH60		円形	径4.6深さ0.1	壁溝	SH14	
SH61		円形	径7.0深さ0.1	炉・張り出し	SH15	
SH62		不明			SH16	
東水路	SH63	円形	径6.4深さ0.1	炉	焼失家屋	SH01
南水路	SH64	円形	径7.0以上深さ0.3	壁溝・ベッド	焼失家屋	SH02
	SH65	不明				SH03
	SH66	円形	径6.0以上深さ0.3	壁溝・ベッド	焼失家屋	SH04
	SH67	隅丸方形	4.6×不明×0.3	炉・壁溝・ベッド	焼失家屋	SH05

第2表 竪穴住居一覧



第26図 平成6年度調査区北半部遺構配置図 (1/500)



第27図 平成6年度調査区南半部遺構配置図 (1/500)

高校新設事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報

多肥松林遺跡  
鹿伏・中所遺跡

平成6年度

平成7年3月31日

編集 財香川県埋蔵文化財調査センター  
〒762 坂出市府中町字南谷5001番の4  
電話 (0877)48-2191(代表)

発行 香川県教育委員会  
財香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 株式会社 成光社